（昭和五年五月二十四日 第三種郵便物認可）　昭和十三年十二月十五日　千曲時報　第百五號　（一）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　上田市上田野長　千曲時報社
印刷所　上田市上田町　中澤印刷所

秋田縣の種苗交換會の紹介

中澤二郎

秋田縣農會主催の種苗交換會が本年實に五十有八回を重ね十一月十五日より一週間能代港町で開かれた。

こうした會合が連綿として明治大正昭和の三代に亘り其の間幾多、世の變轉に順應し乍ら五十八年の長き間續いて來、しかも猶今日盛大を極めつゝある事は驚異に價する。次に少しく之を紹介しよう。

元來本縣は衆知の如く積雪多く耕作期間が短く氣候又良好と云ひ難く、農業には余り惠れて居るとは云ひ得ない。殊に舊藩時代幾つも小藩に分たれて居つた爲に當時の片意地な氣風が殘つて居り、農村相互の關係が親密でなく、明治初年には勸業奬勵が極めて困難であつた。然る所明治十年當時縣の勸業課長に樋田暮一と云ふ非常に勸業に熱心な役人があつて、農聖石川翁と共に勸業談會と云ふものを開いた。之は縣内を五十余の農區域に分つて、之の區長が縣廳に集つて勸業の相談事をなしたのである。其の席上一篤農家佐藤九十郎と云ふ人が「種子交換の趣意書」を出して其の可否を諮り各人の賛成を得た。其の趣意書には次の樣な事が書いてある「……其の擔當區内の諸植物の見本、現品を携へて、毎年十月或ひは十二月迄に於て、豫め日を期して縣下へ集合し、其の効用を衆人に示し其の要求の物品は互に交換すべし……」とある。

此れに依つて縣の事業として明治十一年十一月期間一週間第一回種子交換會（初めは種苗と云はず）を今日の農事試驗場の前身なる八橋村（今秋田市に併合）の植物園に於いて開設した。當時の報告によれば種子を分つて根、幹、皮、葉、花實の六部に分ち各自の携帶せるものを展覽し合ひ會終れば之を交換し、稻に就ては特に土質栽培法迄詳記して互の智識、經驗を披瀝し合ふとある。之全く五十八回を重ぬる交換會の最初であつたのだ。

第二回は八橋村博物館、第三回は同村育種場（植物園の後身）と繼續開催され奥羽線も羽越線もなき頃全縣下から續々と集つて來たのである。

斯く其の起原を考ふる場合石川翁を絶對に忘れてはならない。翁は秋田縣民特に農業に關係するものゝ崇拜の的となつて居る。否縣内のみならず全國に多くの信者を以つて居る所の農聖である。翁は二宮尊德翁と其の言行が非常によく似て居り「石川翁と二宮翁」と云ふ本迄出て居るが其の非常な超人的な勢力によつて品種の研究、栽培法の比較之による勸業等の技術的な方面から、思想的方面には農業に關する極めて確固たる信念をもつて之を說き、他方三十万首に上る和歌俳句を作り、翁の能筆によつて殘されて居る。實に偉大なる技術者思想家であり歌人であり書家である。

翁世六才の明治十三年歷觀農話連と云ふものを作つて之を主宰した。之は五百名近くの連中を有し、又の名を手鍋連と稱するが如く、無用の冗費のかゝらぬ樣に篤農家を歷觀し、意見を糾し、研究し合ひ本縣の農業の進歩に非常な貢献をなした所のものである。殊に此の連中が徒らに空疎な書生論でなく老農を中心としたして おかねばならぬ。

極めて地味な研究團體であつた事を特記

當時本縣にこんな語草があつたと云ふ。

「秋田縣の勸業には父母がある。父は種苗交換會で母は歷觀農話連である」と。

之を聞いても如何に之等の會合が幼稚な本縣の農業を叱咤鞭撻したかが伺ふ事が出來る。

斯くして種苗交換會は農話連と緊密に結んで大いに其の意義を高揚しつゝある折明治十八年危く廢止の運命に瀕した。

それは明治十八年政府の財政整理の影響を受け、縣の經費の削減の爲に種苗交換會にも斧鉞が加へられ一ケ年置きとなつた。此の時石川翁は率先して農話連の連中を勸員して其の會の性質上より連年開催の必要を信じて非常な苦心を拂つた結果遂に農話連自身が此の會を引き受けることになつた。其の決心を赤川縣令に「種苗交換會開設の儀に就き願」として出した。卽ち「……第一勸業場拜供且、御保護（補助金の意か）相成り度く、賞與品御下付相成候樣……」と願ひ出したが、縣令よりは「……保護、賞品下付の儀詮儀難及候事」で一蹴された爲に農話連自體が互に幾分の費用を出し合ひ、第九回目の交換會を行つた。反撥的な刺戟もあつたらうが農話連に移つてから例年に倍して盛大となつて行つた。猶興味ある事は赤川縣令の後の青山知事は卒先して會の爲に多額の寄付をなし、縣廳の役人又相應の寄付をなし、會の趣旨には賛成して居るが縣の財政上致方なしと云ふ所を示し當時の役人の片鱗を伺ふことが出來る。

斯くして一度農話連に委ねられたが明治廿六年再び縣事業に戻つた。當然の歸結である。續いて農會法が發布され縣農會の組織が變るに及び明治三十三年縣農會が之を繼承して今日に及んで居る。

猶年を重ぬるに從つて順次藁工品、農具水稻立毛、水産、家禽、繭、眞綿、農産加工品、木炭等々を加へ最近に於ては事蹟考案なる部迄設けるに至つた。各官衙試驗場、學校は夫々の參考品を毎年目新しく出品して居る。

猶又會場に就いては鐵道の開通により明治四十二年より、郡部に順次開設する事になり、大いに觀覽者に便するやうにした。開催町は四、五千圓にわたる協賛費を出し、小學校を會場に提供し、全町は擧げて此處一週間の農民祭と化せしむるのである。

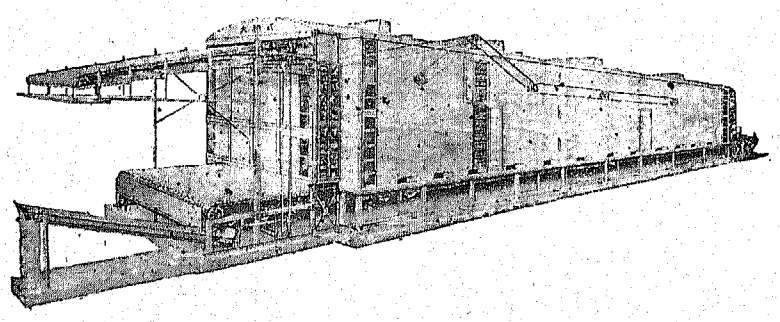
各郡農會は此の前後十日間臨時事務所を作つて技術員は其處に駐在し農話連以來の「談話會」をやり其の年の作柄の話と銃後農業經營に就いて相談をする。又分たれた各部は各々「懇談會」を毎日行つて居る。然かも之等は農話連が勸業の母であつた如く、交換會には「談話會」、「懇談會」は極めて重要な役割を持つて居るのである。

又他方では其の年の農事を一片付した各種團体、學校の同窓會は之をチヤンスと盛大な懇親會をやる。一般參觀者又二十餘萬を算し、之れ又時ならぬ景氣を擧げる。

元來東北の地は酒の消費が多いと聞く。殊に本縣は東北中で一人當消費が一番多いと聞く。然かも瀾漫、兩關、新政と云ふ天下一流の美酒が造られる。此の會期中の消費高の程が想はれる。

筆者も一日參觀した。本縣に於ける產業のあらゆる部門を動員させた其の盛大さには一驚した。縣農會の經費六、七千圓に上り、出品點數六千五百に及び之に詳細な審査が加へられてゐる。素より此の種の會合が品評會共進會として他縣に見られない事はない。併し其の盛大さが毎年行はれ然かも五十八年に涉つて繼續されて居ることは全く他縣に之を聞かず注目に價する。今でこそ研究機關指導機關がよく發達し居る爲め交換なる會意は薄いかも知れぬが、本會が偉大なる勸業的事業である他方、比較的娯樂の少い本縣の全縣的な農民祭として力强い存在意義をも併せ持つ事を知ると同時に石川翁初め先覺篤農家の燃ゆるが如き勸農の意氣に深き敬意を忘れてはならない。

終りに本會の各部を示さう。第一、水稻大小豆、雜穀。第二、園藝品類。第三、藁工品、農產加工品及び副藥品。第四、繭、繭絲加工品、桑苗。第五、山林種苗。第六、事蹟、考案。第七、木炭。

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
二五九九年代表型
【各種型錄贈呈】

營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまヤホイロ
特許サンコー式濾過淨水裝置
特許サンコー式廢湯吸熱器
特許サンコー式高壓ポンプ
特許サンコー式トラップ
製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

平ちやんのこと

克郎

日支事變の進展と共に、我々は堅忍持久とか、長期建設なる言葉を、有名人士の講演中に、或は論説中にはた又商店のショウウインドーの廣告中に屢々、聞いたり見たりする樣になつた。尤もこの長期建設なる言葉は最近のものであるが、蔣介石が飽く迄長期抗戰を標榜して對日政策をとる以上、我々としても、東洋永遠の平和の爲に、是非共に長期建設の理想に向つて邁進せねばならぬと云ふ意味だらうと思ふ。この長期建設の目的を達成する爲に國家の經濟に持久力を持たせる樣な色々の法案が成立され、爲に國民生活の上に之が反映して、國民は少し位の不自由は甘んじて忍ばねばならぬ樣になつて來た。スフ入りの洋服及綿布、之等は純毛の洋服或は純綿の布に比較して悪いのは誰でも經驗して知つて居る。之は一例に過ぎず、鐵、革等總ての部門に制限が加へられて居る事は僕がくどくどしく駄辯を弄する迄もなく誰でも知つて居る事である。

そこで輸入禁止のものを、何んとか國産で間に合はせ樣と、盛んに代用品の完成に官民一致して努力する樣になつて來て居るのである。

以上で僕がものせんとする拙文のイントロダクションは終了とするが、愈々本文に入るに前立つて、抑々平ちやんと代用品との關係は一体何んだと、聽く前にもう少し僕は語らして貰ふ事にする。平ちやんの身元を明にする爲に、昭和九年以降の會員名簿の任意のものを繙つて見よう。製絲二一回卒横澤平と云ふのがある。實にその横澤平の事である。平ちやんとは僕達が、學生時代に好んで呼んで居たペットネームなのである。

僕は二十日頃の東京朝日新聞で同社主催、大阪府市及商工省後援の代用品發明考案懸賞募集は、片倉大宮試驗所のシルクプロックで作つた無音齒車が見事一等賞に當選し金一千圓也を頂戴し、而もこの考案者が小松とか何んとか云ふ東蠶出身の若い技師であるのを見てチョット悲觀したものである。ところが五六日後、林教授から本校卒業生で而も君と同級の横澤君の皮革代用のグラッドストンバックが二等に當選し、而も一等候補に噂されて居ると云ふのである。

平ちやん、君の認識不足も甚しいなんて云ひつこなしにしよう。實を云へばグラッドストンバックが二等に當選したと云ふのは知つて居たが、之が君の作だとは夢にも知らなかつた。何故か？でも君の名前が出て居なくて唯蠶絲化學工業所とあるのみだものわかるものか。僕は今その罪ほろぼしの心算で君を堂々と千曲時報の上で全國の同窓の諸彦に紹介し樣と思ふ。千曲時報ではチョット心淋しいが、はがゆい氣持を我慢して許して戴き度いと思ふ。

平ちやんは、確か今年二十六歳の春秋に富む前途有望の身の樣に記憶する。入學したのが昭和六年で、當時は紅顏の美少年で、僕等の樣な千軍萬馬の痩浪人とはチョット趣を異にし、現役で入つて來たグループでまあ（まあと云ふ間投詞を許して戴かう）秀才の一人であつた樣に思ふ。當時僕等はすでに額の下部には浪人の辛酸を明瞭に物語る樣な、針金樣の鬚がチラリホラリと散在して居たものであるが、君の顏は實にうまい形容と思ふが卵の樣に平滑で兎に角ハンサムだつたと思ふ。今でもそう思つて居る。横澤君怒つてはいけない。讃めて居るんだからね。

僕は最近君に會ふ機會を持たないが、現在の僕には君の文學を論じ、詩に興じた學生時代のロマンチックな所丈が君を最も良く表現する特徴として、強く網膜の中に燒付けられて居て君を想ふと何時も、詩を想ひ、音樂を聯想するのだが、よし君の心の奥底には情操的の分子が盛んに躍動を續け、美に對する感受性とでも云はうか、そんな種類のものが、學生時代の殘滓の樣に、現在の君の生活要素の一部にはなつて居るにせよ、君の現在の顏とか氣掛とか云ふものは大部變遷して來て居る樣に思はれる。尤も顏がそんなに百面相の樣に變つたらそれこそ大變であるが、僕の云ふのは顏から受ける感じの意味である。『往年のロマンチスト、今をときめく大發明家』か。何んだか百パーセントのデヤーナリズム的の價値を僕はこの題目中に發見出來る樣な氣がするぜ。

今は僕は、否僕等と復數にした方が良い樣だ。聲高らかに、君の長年月に亘る努力と結果に對し、絶讃の言葉を呈しやう。同時に君の頭腦と今後の活動に少なからぬ期待を掛けることが出來る。

僕が學校に來た當時は君は未だ松本の長野縣工業試驗場に勤務して居て、繭毛羽から、何んとかを作る機械を發明し、特許を取つたとか聞いて居たが、その後昨年の卒業式の折、工業試驗場長宗像氏の鞄持ちとして、母校を訪ねられた時、官舍の僕の部屋の暖爐にあたり乍ら蠶の解舒に超短波を應用したらどうのとか、絹から皮革を製造する下準備として、二月頃視察旅行をしたとか、色々の六ケ敷しい問題を語り合つたが、當時すでに君が今日完成した皮革の製造を計畫して居たのを思ふと、君の洞察眼に一種のするどさを感んずると同時に、君がそんなに迄も先見の明があつたのを知らずに居た僕のそれに顧み無きを感んずるのだ。

僕等は發明發見と云ふと、直にエヂソンを聯想し、どえらく六ケ敷しいものゝ樣に考へてしまふからいけない。想像と現實とは必ずしも斷丘の樣なものではなく、平坦なる場合がある。寧ろ平坦なる場合の方が多いんじやないかと思ふ。唯現實から創造の世界を眺めた時に、創造し樣とするものが餘りにかけはなれた姿に見えるからで案外に近いものかも知れない。之は僕一個人の感想であり、ミソ付けでも何んでもない。然るに誰でもが出來ず、而も世の中を稗益する樣な發明の出ないのはどう云ふ譯か。僕は眞摯な勤勉とたゆみない努力とに尊敬の念を禁じ得ない。

つい先日の代議員會の席上で、お偉いお方が、上田出は學究的には優秀な頭腦を持つて居るが、實際にはどうも拙いじやないかと云ふ意見が出た樣である。勿論之は一般的の表現法であつて、以上の意見の反證とはならない迄も、平ちやんが、今後益々需用のある皮革代用品を發明したのは、國民生活をこの分野に於て潤澤にするは勿論、吾等同窓生として大いに推賞しても良いと思ふ。

最近僕等の間で、或る男と或る男の對談であるが、人間すべからく金を儲けねば駄目だ、と云ふ話しが出た。

Aが云ふのは

「俺に金があつたら、飛行機に乘つて上田の市中に札ビラを捲くんだがなあ。」

と。

無論、Aの云ふのは單なる修辭上の言葉であるが、僕も時々不覺にも、そんな盲念になやまされる事がある。何にも金儲けと發明發見とを結付けなくても良いのだが、兎角發明でもすると、巨萬の財を蓄積出來る樣に思はれるのが素人の淺はかさだ。この間もMから手紙を貰つたがどうも最近金儲けに急しくてね、とか何んとか一通の事を書いて來たが、人間の通有性に及んだ人生觀の移動である。

最後が變てこな結びになつてしまつたが、この僕の至らないペンの跡が果して君の功績の萬分の一にでも昇揚し得たかどうかは、僕に就ても疑はしいが、少くとも僕はその心算で書いたのである。諒とせられよ。

冬休期間變更

母校の冬休は從來十二月廿五日から翌年一月十日迄でありましたが今年から夏休及春休を五日宛減し冬休を十日間增加せらるゝ事となり從つて本年の冬休は十二月二十日から明春一月十五日迄となりましたから御含み置きを願ひます。

入學案內

一、募集人員　養蠶科、製絲科、絹紡織科、通計百名
一、出願期日　一月十一日より三月十五日迄
一、試驗科目　無試驗檢定
一、試驗期日　一月十一日より一月卅一日迄
一、試驗場所　數學（代數、平面幾何）、英語（英文和譯）
三月二十三日（午前學科、午後體格檢査）口頭試問）
上田（本校）、東京（文理科大學）、名古屋（第一師範學校）、京都（高等工藝學校）、岡山（醫科大學）、福岡（九州帝大農學部）

入學願書內書入用者は郵券三錢封入本校教務課宛申込次第送附す

製絲教婦養成科入學案內

一、募集人員　約十五名
一、出願資格　高等女學校卒業者又は之れと同等の學力を有するもの
二、高等小學校卒業後一ヶ年以上製絲業に從事せるもの
一、出願期日　一月十一より三月廿二日迄
一、試驗科目　數學（算術、代數、平面幾何）、國語（作文を含む）
一、試驗期日　三月廿六日（午前學科、午後體格檢査、口頭試問）
一、試驗場所　上田（本校）
一、入學志願者心得　入用者は三錢切手封入本校教務課宛申込まれたし

上田蠶絲專門學校

母校ニュース

相澤君縣下青年柔道選手權大會に優勝

母校柔道部相澤清正君（紡二）は去る十月二十三日上田武德殿に於て行はれた縣下青年柔道選手權大會に出場、美事荒武者を投げ倒して優勝、選手權を獲得した。

蹴球クラスマッチ　十月廿五日から十一月五日に亘り放課後を利用して校庭に於て蹴球クラスマッチが行はれ紡織科三年チームが優勝した。戰績次の如し。

第一回戰
絲二 2—0 蠶一　紡一 1—0 紡二
蠶二 2—0 絲一　蠶三—棄權 絲三
紡三不戰勝

第二回戰
絲二 0—1 紡一　紡三 1—0 蠶二
蠶三不戰勝

準決勝戰　蠶三 0—1 紡三
決勝戰　紡三 2—1 紡一

紡一 F.（尾田 橋野田 松内 石馬岡）
紡三 F.（岡立邊田田 鶴石渡飯柴）
H.（井澤村 淺中宮）
H.（坂田田 宮飯下）
F.B（屋田 土臼）
F.B（平取 古鷹）
G.K 東
G.K 北崎

劍道クラスマッチ　劍道クラスマッチは十月廿八日より一週間に亘り放課後母校道場に於て行はれ紡織科及本館の職員チームも加つて賑ひを呈し左の戰績にて三級殘りリーグ戰を行ひ絲一6、蠶三5紡二4にて絲一が優勝した。

第一回戰
蠶二 3—2 本館　蠶三 6—0 紡織
絲一 3—2 絲二　紡三 3—2 絲三
紡一 3—2 蠶一　紡二 不戰一勝

第二回戰
蠶三 3—2 蠶二　絲一 4—1 紡三
紡二 3—2 紡一

決勝戰（リーグ戰）
紡二　蠶三（二對三）
先鋒小幡×——○齊藤
中村○——×江崎
横山×——○土屋
相澤○——×重田
大將三宅×——○目崎
絲一　蠶三（三對二）
先鋒江山○——×齊藤
森山○——×江崎
足立×——○土屋
畠山×——○重田
大將井上○——×目崎
紡二　絲一（二對三）
先鋒小幡×——○江山
中村○——×森山
横山×——○足立
相澤○——×畠山
大將三宅×——○井上

柔道クラスマッチ　十月二十九日より數日に亘つて放課後母校道場に行はれた柔道クラスマッチの戰績は次の如く決勝戰は紡三對蠶二にて蠶二が優勝した。

第一回戰
絲一 1—3 絲二　蠶一 0—3 蠶二
紡一 0—4 紡二
紡三不戰勝、蠶三、絲三棄權

第二回戰
絲二 1—4 蠶二　紡二 2—3 紡三

決勝戰
紡三　蠶二（一—四）
鶴岡×——○松田
下田×——○北村
飯田（省）○——×柳澤
西合×——○楠八重
飯田（武）×——○城口

野球クラスマッチ　野球クラスマッチは十一月三日を中心に一週間位に亘つて放課後母校々庭に於て擧行され連日好天氣に惠まれ時局柄各クラス選手は非常な元氣で白熱戰を展開し優勝戰は紡三對蠶二となり十一對五のスコアを以て紡三堂々優勝した。

庭球クラスマッチ　十一月初旬から行はれた庭球部主催の庭球クラスマッチは本年特に早期に訪れた降雪の爲に全部行ふことが出來ず現在殘つた左記チームを優勝チームと決定した。
本館、蠶三、絲三、紡二

卓球クラスマッチ　十一月初旬から放課後、點燈される頃まで熱狂裡に繼續された卓球クラスマッチは各學年共養蠶科チーム斷然優勢にて蠶三Aチーム、同上Bチーム、蠶二Aチームが殘り、現在三チームのリーグ戰を完了しないが蠶三Aチームが最優位も推測される。優勝リーグ戰及選手は左の如し。
蠶三A 3——0 蠶二A
蠶三B 3——1 蠶二A
蠶三A　不戰　蠶三B
蠶三Aチーム
青山武、有川博、鈴木彦佐
西川正夫、長谷川政雄
蠶三Bチーム
上原眞德、小山長雄、土屋久雄
高野憲三、目崎武美
蠶二Aチーム
小川泰弘、田中光雄、柳澤一郎
大西三郎、鈴木高明

明治節拜賀式　十一月三日午後八時より講堂に於て全校職員生徒出席明治節拜賀式を行つた。

体育デーに傷病兵慰問　十一月三日の明治節、体育デーには職員、生徒、傭人全部にて上山田陸軍療養所に傷病兵を慰問する事に決定、午前八時講堂に於て拜賀式終了後校門を出發、上田橋を渡つて千曲川に沿ひ、山野の紅葉を眺め、快い空氣に觸れ、輕快な徒歩にて十時頃千曲公園に到着、約三十分間餅菓子を食べて休憩、再び蜿蜒たる列をなして行進し、途中にて中食を濟ませ、午後〇時半頃上山田陸軍療養所に到着、慰問の辭を述べ慰問金を贈呈し、音樂部の演奏、應援リーダーパツパを紹介する豫定なりしも、傷病兵は八幡神社へ祈願に、或は野球等に出て少數なりし爲中止、所内の醫療設備等を見學して退所、二時半自由散策となし、五時二十二分戸倉驛發にて歸還、五時四十四分上田着、驛前にて解散、慰問を兼ねた体育の一日を終へた。

織維工業學會に香山助教授出席　十一月五日午後二時より東京市京橋區新橋藏前工業會館に於て、織維工業學會臨時總會開催され、本校よりは香山助教授が出席した。總會は學生を準會員とし會員年四圓二十錢を徵集する事、入會費二圓は今後徵集せざる事が決議され引續き講演會となり桐生高工教授吉田善一郎氏の「織維の膨潤と其の應用」又東京帝大工學部助教授工學博士牧鉞夫氏の「建築々料に就て」があり之が終ると六時から懇親會があつて終了した。

劍道昇段　劍道部は十一月三日左の諸君に對し昇段又は編入を發表した。
右初段ニ進ム
絲一　若林伸明
右初段ニ編入ス
十一月十三日武德會上田支所に於て武德會昇段試驗に合格昇段せる者左の如し。
三段　蠶三　古平太三
仝　蠶三　有川博
二段　紡二　宮原丈夫
仝　蠶二　工藤榮次
仝　絲二　中村廣
仝　蠶二　鈴木高明
仝　紡二　伊藤正義
仝　蠶一　松田得治
初段　絲二　寒河江武
仝　絲二　土屋芳樹
仝　蠶三　目崎武美
仝　蠶三　重田正喜
仝　蠶三　齋藤重利
仝　蠶二　山内末男
仝　學生課　宮原大正樹

國民精神作興詔書奉讀式　十一月十日第一時限に於て國民精神作興に關する詔書並に事變一週年に下賜された勅語の奉讀式を講堂に於て擧行し、國民精神を强調、銃後の心構へを强固にした。

蒲生教授蠶種業者大會に講演　第二十一回長野縣下蠶種業者大會が十一月十一日午前十一時より上田市公會堂に於て開催され農林省蠶絲課長永井治長氏、蠶絲試驗場長平塚英吉氏、長野縣蠶絲課長西村實二氏外各蠶業試驗場長、縣議等の臨席に蠶種業關係者約七百名が參集、二十七提出問題の討議を行つたが十二日の委員會に移すこととし、引續き平塚英吉氏農林省技師布谷芳太郎兩氏の講演があつて午後五時終了、翌十二日午前九時より討議問題の決議があり終つて母校蒲生教授、蠶絲試驗場松本支場長水野辰五郎氏長野蠶業試驗場長水井壽一郎氏、三氏の講演があつた。各氏の講演題目は左の如し。
平塚英吉氏　蠶絲の將來と品種
布谷芳太郎氏　蠶種製造業の改善に就て
蒲生俊興氏　晩秋蠶の作柄と蠶の榮養問題
水野辰五郎氏　蠶品種雜感
水井壽一郎氏　夏秋蠶品種誠驗成績

井上校長令孃御結婚　井上校長令孃歌子さん（廿五）に御養子を得られ十一月十二日東京に於て結婚式を擧行され東京に於て新居を構へられた。幾久しく添ひ遂げられん事を祈る。因に新郎隆吉氏は當年卅一歲、三高より東大理學部卒、現在大學院に於て小倉博士の許に植物組織學專攻中の俊才であり歌子さんは成蹊高等女學校專攻科出身の才媛である。

柔道部豫山神社奉納試合に出場　十一月十三日より數日に亘つて嚴肅に擧行された長野縣松代町の象山神社（佐久間象山を祀る）遷座祭に於て催された奉納額柔道試合に母校柔道部より濱田秀彌（絲三）、相澤清正（紡二）、田中光雄（蠶二）、萩原孝三（蠶二）、瀧澤善三（紡選一）の三四段の四君が出場、縣下の强豪を片端からなぎ倒し無人の境を行く如くして相澤清正君（四段）優勝し濱田秀彌君（三段）第三位となつた。

第二回文化講義　本年度第二回の日本文化講義は十一月十四日午後一時より二時間に亘り、日本精神文化研究所員、藤澤親雄氏の「東亞新秩序の建設」と題して行はれ全生徒及職員の一部が聽講した。現下對支文化政策の攻究盛なる時、主として北支の指導精神、漢學の復興、新民會の意義、活動等から東亞聯盟結成の理想を述べられ非常なる感動を與へた。

閑院宮春仁王殿下を御見送り奉る　群馬、長野に亘つて行はれた近衛師團の秋期機動演習に御參加遊ばされた閑院宮春仁王殿下には鹿澤、菅平方面の演習を終へられ十三日には別所溫泉花屋ホテルに御宿泊、十四日午前十時三十六分上り列車にて御歸還遊ばされると承り、母校職員生徒各科一年生が代表して市各種團体と共に驛前に堵列御見送り申し上げた。

クラス對抗辯論大會　辯論部では本年初めての試みで他後友會各部のクラスマツチと同樣の形式で各クラスから代表辯士を選出させて雄辯を揮はせ一般講評の結果、優秀順位を決定する事にし、十一月十五日（土）午後一時より講堂に於てクラス對抗辯論大會を開催、午後三時半盛會裡に終了した。今後も此の形式で續行する豫定である。當日の受賞者は蠶三代表鈴木彦佐君、蠶一代表門傳東吉郎君であつた。尙各級代表辯士及演題は左の如し。
一、俺の蠶絲業觀　蠶一　門傳東吉郎
一、初めて信州に來て紡一　眞野福夫
一、轉換期の第一步　蠶二　福田六郎
一、現代學生の無氣力絲二　金子肇
一、存在と使用　紡二　小林憲三
一、黎明の丘に立ちて蠶三　鈴木彦佐
（絲一、絲三、紡三は不出場）

蒲生教授日本蠶絲學會小集會に御講演 十一月十五日午後六時よりの東京市麹町區有樂町蠶絲會館に於ける日本蠶絲學會小集會の席上、蒲生教授は「家蠶の發育とヴイタミンCとの關係に就ての研究、第二、家蠶の發育に伴ふヴイタミンC含量の變化に就て」と題して講演され非常な好評であつた由。

管樂部NKより放送 管樂部では十一月十五日午後六時より二十分間、子供の時間に長野放送局よりローカルとしてハーモニカ合奏を放送した。同窓各位には懐かしくお聞きの事と思ふが華々しい出來榮であつた。曲目、放送部員は次の如くである。

曲目

一、上田蠶絲專門學校校友會會歌（橋本國彦氏作曲、鹽入重雄編曲）
二、双頭の鷲の下に（ワーグナー作曲）
三、小さな支那人（スミス作曲）
四、アメリカンパトロール（ミーチヤ作曲）
五、クシコスの郵便（ネツケ作曲、鹽入重雄編曲）

放送部員

指揮　目幡　暎　一（職員）
第一ハーモニカ　阿形　一　三（職員）
税田　廣　喜（絲二）
第二ハーモニカ　中錦棗久郎（絲三）
野島　忠　義（絲二）
バリトン　三宅　太（紡二）
龍谷　精　一（紡二）
バス　關谷　英　一（蠶二）
オクターブ　尾崎　毅（蠶一）
土屋　傳（蠶三）
ダブルバス　田中　和　人（絲三）
紫田　利　男（紡三）
高橋　一　郎（絲二）
アツコーデイオン　箱山　住　夫（蠶三）
ギター　鹽入　重　雄（絲三）

植民講話 各科三年生の特別講義たる「植民講話」は全國養蠶業組合聯合會長男爵稻田昌植氏に依り十一月十五日の午後より十六日の午前迄第四教室に於て行はれ尚十六日正午千曲會館に於て職員有志に依り同氏の午餐會を催した。

高田正氣氏新任 本春卒業前橋市日本人造繊維株式會社に勤務された高田正氣氏（絲二五）は都合により退職、十一月十六日付にて母校人絹部に臨時副手として勤務される事となつた。

演香三氏講話 滿洲國產業部技佐濱香三氏（紡三）が來校せられたるを機とし十一月十八日午後一時十分より一時間に亘り第四教室に於て滿洲國の繊維工業に就て講話があり全校生徒並に職員の一部が聽講した。

山岳部主催スキー座談會 例年の如く十一月十九日午後四時より千曲會館に於て、スキー座談會を左記の樣式に依り盛會裡に施行した。

一、部長挨拶　山口　先生
一、スキー用具説明　阿形　一　三（職員）
一、スキー概略史　小林　茂（蠶三）
一、スキーを初める人の爲に　北村元三郎（蠶二）
一、北海道雪の想出　佐藤　彌（蠶一）
一、經驗談　阿形氏外部員
一、本年度山岳部行事目崎　武　美（蠶三）
一、質議應答

座談會終了後町田博氏の援助を得て映畫會を行つた。内容は次の如し。

一、スキーランナーの夢（馬場氏提供）
一、新雪の北アルプス（馬場氏提供）
一、山の魅惑　（鐵　道　省）
一、スキーの妙味　（鐵　道　省）
一、スキー祭、殘雪の猫岳、勤勞奉仕、本校廿五週年紀念、演習等

本年度山岳部行事豫定

一、合宿練習
前半　十二月廿一日より廿八日迄
後半　一月八日より十五日迄
集合場所と時間、前後班共に其開始する期日の午後一時迄「ヒユッテ」に集合、尙ツアー參加者は前日に集合。
二、校内スキー講習會（學生の爲に）
前半　本月廿三日より三泊四日
後半　一月十一日より二泊三日
指導者　山口、宮坂、茅野、阿形の諸先生及山岳部々員。
三、スキー競技大會
スキー大會　菅平松代飯綱池の平の四回
スキー登山　猫岳、四阿山
四、スキーツアー（二回）
イ、烏帽子、湯の丸方面二泊三日　十二月廿八日出發
ロ、志賀高原方面三日四日　一月五日出發
五、山岳部主催校内スキー競技大會　二月上旬に擧行の豫定
六、ヒユッテ使用期間（食事可能）
十二月廿一日晝食より廿八日朝食迄
一月五日夕食より十五日朝食迄
七、合宿日課表
一、起床　六時半（準備運動其他）
一、朝食　七時—八時
一、練習　九時—十時（基本）
十時—三時（自由）
一、晝食　十一時半—十二時
一、練習　三時—（基本）
一、夕食　六時—七時

今冬菅平庇宇亭料金は左記の通り決定致しました。

宿泊料　（山岳部）
食費（三食）　十五錢
休憩料　六十錢
五錢

但、休憩料は日歸りされる方に限り使用燃料代として納入されたし。宿泊者は宿泊料及食費のみ御支拂ひ下さい。

一泊　七十五錢
二泊　一圓五十錢
三泊　二圓二十錢
四泊　二圓八十錢
五泊　三圓四十錢
六泊　四圓十錢
七泊　四圓七十錢

講習會申込者
前班　二圓五十錢（三泊四日）
後班　二圓　（二泊三日）

新野元治郎氏退職 六月より母校養蠶科に副手として勤められた新野元治郎氏（蠶二一）は今回下伊那農學校に轉任される事となり十一月二十一日付退職され二十二日養蠶科職員、副手會員の見送りを受けて赴任された。

湯川秀夫氏講演 滿洲國立柞蠶種繭場長湯川秀夫氏（蠶一）が代議員會出席の爲はるばる來訪されたるを機に母校では十一月二十四日十一時五十分より一時間半に亘り第四教室に於て滿洲柞蠶現在將來に就て講演があり全生徒並に職員一部聽講した。

防空訓練實施 昭和十三年度第二次東部防空訓練が十一月二十六日午前八時迄行はれた。今訓練より二十八日午前八時迄行はれた。今訓練の目的は主として燒夷彈攻擊に對する防空機關の活動を訓練し、以つて都市の防空施設組織の强化促進と精神訓練の徹底を圖り併せて第一次訓練の經驗に鑑み燈火管制の徹底を期するに在り、母校でも一特設防護團として廿五日第四時間目及廿六日午後一時より講堂に於て全校職員生徒に對し校長、行元主事より防空訓練に對する注意があり實施に當つては總務班（班長佐藤利教授）、警報班（班長遠藤教授）、防火班（班長行元教授）の三班が活動、之に連絡班の班長佐藤春教授、市原副手が應援された。其他の係職員、生徒は授業外に燒夷彈消火を見學し廿六日午前の空襲の際には本校にも爆彈二個落下し消火訓練演習を行つた。

甘茶美術展覽會 母校内のアマチユア作品を集めて催されてゐる恒例の甘茶美術展覽會は、昨年事變の爲に中止したが時局は新秩序建設の段階に入り、徒らに自戒萎縮に走つて消極性になるべき時でないので本年は開催することになり、例によつて代議員會の日を挾んで十一月二十日から二十七日迄裝飾した蠶室に於て催された。昨年催されなかつたので樣子を知らない者もあつたらしく生徒の出品は少なかつた。然し寫眞、洋畫なぞは例年より出品數も多く内容的にも向上した樣に思はれた。畫も書道會が出來て居るので生徒の出品も增加し喜ばしい次第である。出品物は、書一七點、日本畫四點生花三點、手藝品一二點、寫眞八〇點、洋畫三七點、計一五三點に達した。尙本年は宮崎高農の中島氏の斡旋にて同校の美術部作品が一二點加はり、向後兩校の作品交換觀賞を約することになつた。作者並に作品（括弧内）は左の如し。

書之部
工藤榮司、正村江津子、小山長雄（二點）高岡米治、中島藤治、鈴木彦佐、山田次男、長澤得榮、松田榮、岡澤正義（二點）關かほる、山邊律子（二點）松村しま子、佐藤澄子、

日本畫之部
井上柳梧（春、秋）、石倉膨石（清流、靜寂）

生花之部
白倉多香子、小林とみ、小山よし子

手藝品之部
市原政治（農民美術品二點）、白倉多香子（ネクタイ）、田中寛（花瓶敷）、石井よし美（フランス人形）、坂井五月（鳥）上原すゞ（毛絲セーター）、片岡よし子（毛絲チヨツキ）、横澤時子（眞綿チヨツキ）、唐澤クニ（草履）、横山春子（人形）、宮本すい（人形、テーブルセンター）

寫眞之部
井上柳梧（樹氷、菊、雪景、峠）、倉澤美德（おもかげ）、山口定次郎（山門、温い雪、靜物、小流）、清水運筴（みよちやん）、金澤勇（試作）、宮坂敬（靜物）靖嶮、林を行く、スケツチ、角間峠）細川豊（うけ、マギー、半過）、茅野功（夏、上信國境にて、春の角間峠、四月の乘鞍岳）、町田博（神域、あやめ、公園の春、彼と俺）、小林敏（療養のひとゝき、無題、構内の朝、庭の雪、日向）、武井仙太郎（峠にて、高原の白樺美ケ原にて、屏風岩、櫻の頃、落葉、朝）、阿形一三（横岳を望む、末雪、秋の陽ざし、摘草、美ケ原にて、坊やの閑日、窓邊の遺秋）、日幡暎一（石柱、日向葵、仁王門スナップ、陽光をあびて、林、雲、樂聖像、遠望、秋光譜、銀扇寮）、小松忠幸（春閑、春の午後、雪花、古城の春、湖岸の岩）、金井正一（無題、菅平）、市川馬之助（中秋の頃、無題）、鈴木彦佐（高原の朝）、橋本正太郎（老麥）、小川典二（春のシムボル、秋の陽ざし、菅平にて）、柴田利男（散策）、小川泰弘（瀞）、北村元三郎（劍岳の朝、六月の八ケ岳）、瀧川春夫（瀬、晩秋の光）、牧野德太郎（小田原城跡）、金子平夫（雲）、深井安兒夫（盛夏、黄昏の古城）

宮崎高農參考品（寫眞）
北尾淳一郎氏（流れ、曇り日、Y旅館の玉子君）、橋本重郎氏（ナイヤガラ瀑布）、日高勇氏（肖像二點）、大崎優氏（妹、河岸風景）、井出口希秀氏（母）、佐藤主基男氏（汽車、ポートレート）、高村正一氏（笑顔）

洋畫の部
小山和夫（似顔、乙女習作、憲ちやん、習作、少女習作、靜かなる裏道、冬日雪暮）、小林敏（芽のふく頃）、岡澤正義（初秋の半過、千曲川、けやき、村の入口、靜かな日、野分）、小山長雄（俺んちの傍、玄關、布引山、スケツチ四點）、西川正夫（夕燒、陰）、板谷隆（晩秋）、渡邊博（山の牧場、七味温泉）關谷英一（秋A、秋B、小みち、森の端、秋、花、青服の少女）、中村茂久（ばら、草むら、山湖、少女、曇目）、坂井五月（秋）

第十二回千曲會代議會議事抄錄

代議員會次第

第十二回千曲會代議員會は十一月廿三日母校講堂で開催された。開會に先立ち午前九時半より科野大宮神社に於て出征兵士武運長久祈願祭、午前十時半より講堂に於て戰死者慰靈祭、引續き講堂西側廣場に於て戰死者供養塔建立式を行つた爲め例年より遲れ開會は午前十一時となつた。出席者は代議員卅六名、本會役員十六名、在田會員廿六名に達した。午前十一時蒲生理事長開會を宣し更に井上名譽會長の御挨拶があつた。蒲生理事長より議長選任方法を諮り理事長指名と云ふ事になり東京支會代議員の高畠秀男氏を議長に推薦す。議事に入る前に針塚先生謝恩金贈呈式及阿形先生還曆祝賀記念品贈呈式を行つた。贈呈式の終了せるは午後〇時半、一先づ休會とし千曲會館樓上に於て井上校長の御挨拶と高畠氏の謝辭の後一同午饗を共にする。書食後講堂前にて一同集合記念撮影をなす。午後一時半代議員會再會、蒲生理事長、倉澤理事、林理事より事業報告があり、議事に入る。先づ東京提出の「蠶絲業の狀勢に鑑み母校の教授課目及訓育方針を一層適切ならしむる樣要望の件」を議了し、靜岡提出の「支那事變に關し應召の同窓生戰傷病死者の爲め忠魂碑を建設する事」、岐阜提出の「千曲會銃後の守り强化の件」、福島提出の「千曲會銃後の活動に關する件」の三問題は類似せる故一括審議議了し、岐阜提出の「紀元二千六百年記念の爲め蠶絲學術講演會開催の件」、北陸提出の「向上資金徵收方法に關する件」、本會提出の「昭和十二年度本會歲入出決算並に財産目錄承認の件」、「昭和十二年度歲計剩餘金處分の件」、「會費未納整理に關する件」を夫々可決した。東京提出の「針塚先生謝恩記念資金に關する件」、埼玉提出の「針塚賞設置に關する件」は類似せる故一括し北信提出の「滿支産業調査會活動促進に關する件」、岐阜提出の「滿支方面の就職開拓を圖る爲め會員中有力者派遣に關する件」も類似せる故一括し本會提出の「本會々則改正に關する件」「基本財産處分に關する件」も關聯せる故一括し夫々提出者說明を行ひたる故第一委員會附託とした。緊急動議として本會提出の「針塚先生謝恩金一部記念基金繰入の件」を否決した東京提出の「連絡部設置に關する件」北信提出の「千曲會及其支會の活動强化に關する件」、北陸提出の「母校內に速かに人事課を設置し同窓會內には情報部を新設すること」、山形提出の「母校人事課新設方促進に關する件」の四問題は類似せる故一括し提出者の說明審議をなしたる上第二委員會附託とした。本會提出の「昭和十四年度本會歲入出豫算に關する件」「社團法人に關する件」につき提出者の說明審議を行へる後第三委員會附託とした。委員の選定は議長の指名にて第一委員會は牧、山本、久保田、阿久澤、永田、小川、間宮、門平、石坂、石井、小林（茂）穗坂、太田（本會より倉澤、齋藤、野口小宮山）第二委員會は八木、永井、桑村菅原、小見、宮崎、福島、横山、三宅、高木、深谷、鹽原（本會より蒲生、中澤飯島）第三委員會は岸、小林（勳）、古山伊藤、佐藤、新庄、岡部、小笠原、二宮湯川、猪坂、和田（本會より林、松村、笠原）の諸氏を決定し第一委員は二階西側、第二委員は二階東側、第三委員は階下に退きて委員會を開會す。その間本會は休會となる。五時五十分本會議再開、第一委員長小川保氏代理山本岩三郎氏、第二委員長菅原勇治氏、第三委員長岸勝彌氏より夫々委員會案の報告あり委員會案の如く可決した。斯くて議案全部議了議長挨拶を行ひ降壇す。最後に蒲生理事長閉會を述べ終了せるは午後六時半、議事の進行は順調なりしに拘らず開始時間遲かりし爲め大いに遲れ電燈を點じて行つた譯である。代議員會終了後市內綠町うな藤に於て懇親會を行つた。

針塚先生謝恩金及阿形先生還歷記念品贈呈式

代議員開會に先立ち午前十一時半より講堂に於て針塚先生謝恩金贈呈式並に阿形先生還曆記念品贈呈式を行つた。まづ針塚先生、阿形先生入場せられ蒲生理事長開會を宣し針塚先生登壇、理事長より贈呈の辭を述べ謝恩金目錄を贈呈し針塚先生より「廿五周年記念に於て壽像を建立して戴いた事ですら既に過分と思つてゐたのに今回退職に際し謝恩金の企あるを聞き絕對に見合せて呉れと云ふたが御懇情の厚き、斯くの如き結果となつた。私としては拜受するに堪えぬ。然し今直ちに辭退するは失禮に當る故兎に角頂戴する事とする。衷心から感謝の意を表する次第である。幸ひ身体は丈夫であるから今後諸君の命令あれば及ばず乍ら殘軀に鞭打ち蠶絲業の爲め同窓會の爲め働く考へである。何分よろしく」との謝辭があつた。

次に阿形先生登壇、蒲生理事長より油繪肖像畫の目錄を贈呈し阿形先生より謝辭があり〇時半終了した。

事業報告（蒲生理事長）

「本年四月針塚校長先生が突然退官せられ井上先生が後任となられると云ふ思ひ掛けない事件が起つた。それに就て四月十七日新舊校長送迎會の開催の時同時に千曲會大會を開き針塚先生に對し會員の醵出に依り一萬圓を贈呈する事及び基本金の一部を以つて何か記念事業を行ふ事を決議した。そして直ちに醵出金の募集に着手したのであるが何分にも短時日の事が出來ないかも知れないから此の際基金から幾分か凡そ一千圓位支出する事になつた事を御諒承願ひ度い。

次に昨年の代議員會に於て滿支産業調査會を學術部に設置する事になつた。それに就き其後再三理事會を開きその目的を達成する爲めに幹事を依頼し研究した。先づ昨年秋滿洲へ出張せられたる農林省田口技師を招聘し第一回會合を二月廿八日千曲會館に開催した。其後三月十五日卒業式後支那蠶絲業對策討論會を開催し多數の來會あり其の時の速記錄はあるが之が印刷頒布は非常に遲延し時期が遲れたのと經費も無いので發表を差控へた。華中蠶絲會社原料課長久保田昌人氏が來校されたので我々及學生に對し話をして貰つた。林教授が五月初旬から一ケ月半滿支を視察されたので視察談を聞いた。其他菅原勇治氏が滿洲へ行かれたので調査を依頼し歸つてから講話をして戴いた。十一月十八日には滿洲國產業部の濱香三氏が來校されたので滿洲の纖維工業に就き講演をして戴いた。斯くの如く着々目的達成に努めてゐる。然して最初我々に與へられた題目たる青木企畫院次長を招聘し講演を願ふ件、卒業生の母校職員を滿支に派遣する件はその實現方奔走中校長の更迭に合ひ、機を失し其內に發蠶期となり實現出來ず何んとも申譯が無い。然し井上校長にもお願ひし一日も早く實現す可く努力してもゐる故御諒承願ひ度い。多分昨年の代議員會に於て協賛を得たと思ふが蠶絲學雜誌は九卷三號迄千曲會で編輯發行してゐたが十卷一號本年四月發行から編輯は千曲會でやり發行は猪坂直一氏に願ふ事となつたそして既に十卷一號から四號及び十一卷一號を完成した。之に就ては後刻猪坂氏より報告があると思ふ。然し經營が猪坂氏に移つたとは云へ千曲會に責任が無くなつたと云ふ譯ではないので大いに發展する樣各位の御盡力を御願ひし度い。之の雜誌は千曲會員の學術上の大なる旗幟である事を御承知願ひ度い。」

事業報告（倉澤理事）

「支會數は卅一其他一を加へ卅二となりしものが昨年東京支會より栃木支會が分離し卅二支會となり其他一を加へ卅三となつた。會員數は養蠶科七三五名、製絲科六九三名　紡織科二〇九名、合計正會員一六三七名に準會員一二九名を加へ總計一七六六名である。

千曲會館は廿五周年記念事業の一つたる千曲會の向上資金から五百圓の融通を受けて今日迄經營して來た。幸ひ讀者に主として利用せられる事になり又卒業生其の他の來客、宿泊者も豫想外の多數になり近來百％に利用されてゐる。もう少し增設したいのであるが時局柄致し方が無い。家具宿泊用具は學校で設備して貰つたので三名乃至五名は宿泊出來る。切に會員諸氏の利用を望んで止まない。

次に昨年の代議員會に於て決議され理事者に委囑された事項に付き其後の經過を報告する。

一、應召會員慰問の件は既に慰問袋を發送せる事を昨年の代議員會に於て報告した。其後應召者は前職員〇名、卒業生〇〇名、學生〇名、傭人〇名、計〇〇名となつた。之の外に即日歸鄉になつた者も相當ある。之等に對しては夫々慰問袋を送附した。戰死者は學生及卒業生にて〇名あり之に對して夫々規定の弔慰金五十圓を贈呈し戰傷病者に對しては其の程度に依り七―三十圓の見舞金を贈呈し、應召家族に對しては金五圓を差上げた。而して之の費用は會員一名二圓位宛醵出を願ふ豫定で實行に移つた處、四三九名、七九五圓五〇錢の醵出があつたのみである。然るに既に慰問袋に五百圓、戰死者に七百圓、家族慰問に九五〇圓、計二千二百圓を支出した。即ち醵出は半額に滿たない代議員諸氏が歸られたら支會員に是非醵出せらるゝ樣御願して欲しい。

二、人事課設置の件は委員を擧げて前校長に陳情し快諾を得たが不幸にして校長更迭となり新校長にも御盡力を願つたが經營多難にて職員を減少する、石炭節約の爲め冬休を增加すると云ふ狀態なる爲め未だに實現に至らぬを遺憾とする。無理に作つても適當な書記や充分な事務費が得られなければ何んにもならない。一日も早く實現する樣努力する積りである。それ迄は三科が充分手を握つてやつて行く考へである。御諒承を乞ふ。」

事業報告（林理事）

「蠶絲科學研究會の件を報吉する。同窓會の別動隊として加美好男氏の創立せる蠶絲科學研究會なるものが十數年前より存在し蠶絲總覽なる雜誌を發行してゐた。其編輯人が平澤勝氏に移り更に小見益男氏に移つて經營されてゐたが本年三月突然創立者より千曲會にて之をやる意志があれば債權債務一切を讓渡すると云ふて來たので四月滿支産業調査會後、役員會を開き審議の結果、解散する事は餘りに惜しいので繼承する事と決し會計の內容を調査した處、約六百圓の印刷代未拂があるが一方雜誌代の未收が千五百圓位あり之を經營するには相當の資金を要する事が分つた。依つて之を同窓會の別動隊でやる事とし千曲會の向上資金から五百圓の融通を受けて今日迄經營して來た。幸ひ讀者も漸增の傾向にある故近き將來には獨立してやつて行ける事と思ふ。千曲會から五百圓借用したと云ふ點に對し御諒承を得たいと思ふ。

次に針塚先生謝恩金の件を報告する。本年四月新舊校長歡送迎會の際同時に千曲大會を開催しその時の意向に針塚先生謝恩金募集に着手し現在迄千百名、九千三百圓の申込あり全會員の七〇％に相當してゐる。之れは實際に領收した譯では無いから本當の金額は分らないが我々の希望として金一万圓贈呈したいので千圓位は不足となるかも知れない。その金をどうして支出するか。理事者としては基本金から支出したいと思ふが御諒承を願ひ度い。

一、蠶絲業の狀勢に鑑み母校の教授課目及訓育方針を一層適切ならしむる樣要望の件（東京）

提出者東京支會八木誠政氏より左の如く說明があつた。「現代の狀勢に鑑み母校の教授課目が非常に卒業生を出すに適切なりやと云ふ事が東京で問題となつた。あらゆる課目に相當の革新を要する時期に到達したと思ふ。特に經濟課目には蠶絲政策を盛る事を要する。然して新科目を起し從來の課目を改廢するに非常に時局を認識してやつて欲しい。加ふるに之等に對しては卒業生の相當な人々の意見を參考にして欲しい。勿論訓育方針も之に關聯する。之の問題に對して不賛成の人はないと思ふ。全卒業生の望なる故之の會を機會に母校當局の考慮を願ふ。次第である」之に對し井上校長より「唯今東京支會から學校の教授課目及訓育方針を更新せよとの意見があつたが他支會の人々も同意見であらうと思ふ。私も改正の必要を以前から認めてゐるが何分にも就任早々日が淺いので迫々と改正して行かうと思つてゐる。只今の話の政策方面とかそれの他時局に適した新研究の例へば代用品研究の如きスフの如き知識を授ける必要があると思ふ。云々」との御說明があり之に對し八木氏は再び「校長の御言葉で滿足したが唯一つ學課目の改正に際し同窓生の意見を容れるかどうか聽かなかつたが之はどうか」と質し校長は「學課目の改正は極めて重要問題であるから愼重に研究するを要し、又卒業生諸君の意見も伺ひ度いと思ふが果して御希望通りに行くかどうか確答は出來ぬ」と答へ東京高畠秀男氏は議長席より「私の希望として先刻名前の出た法制經濟も名前は其の儘でよいから絲業定施設法、原蠶種國家管理法の如き教授內要が實社會に觸れた問題を促へて貰ひ度いのである」と希望し議長は「之の問題はもう少し多くの人々の希望を纏めて提出するか又は即決とするか」と諮り倉澤理事より「意見を纏めても同樣なる故即決とせられ度し」と希望し以上の事項を校長に要望した事として即決となつた。

四、支那事變に關し應召の同窓生戰傷病死者の爲め忠魂碑を建設する事（靜岡）

八、銃後の守り强化の件（岐阜）

十四、千曲會銃後會の活動に關する件（福島）

四に對し提出者靜岡岸勝彌氏より次の説明あり「戰傷病死者の靈を慰める爲め母校内の適當の處に忠魂碑又は忠靈塔を建立し同窓生は勿論母校職員學生其他の目に映ずる樣にするは必要であると思ひ上提したのである。同窓生戰傷病死者とあるが職員學生其他も勿論含む。建設方法、費用に就ては腹案は無い。然る可く研究の上實現して欲しい」。

八に對し提案者岐阜間宮成吉氏より左の如く説明あり「之には二つの意味がある。一は直接應召出征せる同窓生に對し我々銃後の援護方法である。之は理事長の説明にて滿足せる故徹回しても差支無い。二は銃後に居る蠶絲業に從事する者に就ては七、九に關聯する故その時に説明する事とする」。

十四に對しては提出者福島安部和氏より次の如く説明あり「銃後の萬金を期する事は最も大切な事である。然るに千曲會銃後會の活動狀況を見るに其の活動資金は一般會員の寄附金に依るものにて資金乏しく充分な活動の出來ないのは時局の重大性に鑑みて甚だ遺憾とする處である。依つて之の際其の活動資金は一般會員の寄附金に依るの外、相當額は本會の基本金利子及經費を節約して支出しそれが不可能ならば基本金を流用し一千圓位支出し一層銃後の活動の萬金を期し度いその意味で提出した次第である」。

以上に對し山陽小川保氏より「靜岡の忠魂碑を作る事はよいであるが未だ事變は終了せぬ故事變解決後改めて提案する事とするかどうか。八を徹回せられたるは賢明である。十四は結構な案であるが慰問は外に國家其他でもやつて居り千圓は千曲會に取つては大金であるが之を一人の勇士に使用するもその人にとつては大金では無い。故に之も八と同樣精神は贊成として徹回願ひそれよりも人事課設置又は滿支進出の方に金を使用せねばならぬ事が澤山あるから其方に廻し度い」との提案あり之に對し靜岡岸氏は「同窓會として建立を決議する事は差支無い。應召會員に誠意を示す意味で之の際建立する事を決議せよ。實行を延期すればよいのである」。と説明し理事長は「忠魂碑に就ては此處に校長も居らるゝが校内でもその問題が起つてゐる。今回建立した供養塔も慰靈と共に學生訓育の一助としたもので永久的のものでは無い。將來學校の方針は同じ場所に忠靈塔又は忠魂碑を建立すると云ふ事になつてゐる。その經費をどうして出すかは勿論未定であるが千曲會が相當額を負擔する事は當然である。故に之の際建立を決議する事は結構である。之の熟度を校長に聞いて置いて頂く事はよい事である」と校内の模樣を説明し議長は「四の提案の主旨は贊成建設する事とし實現は時期を待つ事とする。八と十四は主旨は大部分實現されてゐる故その意志を傳へ理事者に一任する」を滿場に諮り可決となる。

七、紀元二千六百年記念の爲め蠶絲學術講演開催の件（岐阜）

之に對し提出者岐阜間宮成吉氏より次の如く説明あり「學術講演會を希望して來る支會があつたらその支會で開催して欲しい。上田は學術的に進んでゐると云はれてゐる。然しその學術と實用の間に相當の空間がある。製絲に於て特にその感が深い。もう少し實地に應用出來る研究をなしその結果を以て地方の製絲家養蠶家等を集め學術講演を開いて欲しい。そして上田が學術的で且つ實用的である事を示して貰ひ度い。學校には經費が無いだらうから支會で經費を負擔し宣傳しようと思ふ。講演の題目は當方から注文する。支會から依頼したら直ぐにやれる樣に工作して置いて頂き度い。出來得れば紀元二千六百年には上田で開催して頂き度い」。議長より之に對し「本會に腹案ありや」と質ね理事長は「學術堂重が上田の傳統である事は岐阜と同感である。若し之に一歩を讓る事があれば政策では既に第二位に置かれてゐる上田は取柄が無くなつてしまふ。今後井上新校長を中心として學術の府として大いにやつて行き度い。然し之の學問も學問の爲めの學問にて利用價値のないものでは申譯が無い學校職員全部が蠶絲業界の微妙な動きにも多大なる關心を持つて眞劍に研究を續けてゐる。而して研究した事項は蠶絲學會其他の一流學會に報告し又は可然雜誌に發表するも必要である。從つて蠶絲學雜誌の内容向上も必要である。講演會の件は暫くやらなかつたから近い將來に於て開き度いと思ふ。理事會としては未だ腹案がないが研究して見やうと思ふ」と答へ北陸菅原氏は「岐阜の如く學術的になつてゐる處のあるのは意を强くする。然し他の場所では多く實の持ち腐れとなる事が多い。上田出に適する任地は試驗場であるに拘らず上田出の場長が二人しか無いのはどう云ふ譯か。もう少し適所に適材を送る樣に努力して貰はねばならぬ」。山形宮崎秋雄氏は「母校の先生が講演に招かれたら來て欲しい。本年八月蠶絲課主催の白彊病豫防講演會が縣下四ケ所で開催され講師は東京から坪井、本校から佐藤（利）兩氏が出席した。佐藤氏は學問的に話し白疆病のみならず空頭病迄全部をやつた。然るに本年の晩秋蠶は白疆病で無く空頭病の大被害を被つたので佐藤氏の講演の効果は絶大であつた。斯る効果があるもの故講演をお願ひしたら直ちに出席する樣にして戴き度い」と意見を述べ議長より岐阜に對し「理事長の答辯で滿足するや」と質し岐阜氏は「差支なし」と答へ議長は「七は本會で考慮する事とし即決とす」を諮り可決となる。

十、向上資金徴收方法に關する件（北陸）

從來實施しつゝある向上資金の徴集に就ては不徹底の點あるに鑑み之が統制上就職轉補等の機會は其の徴集權を赴任先管轄支會に委任し當該支會に對し新に徴收額の半額を交附する途を開く事

之に對し提出者北陸菅原勇治氏より次の如く説明あり「人を移動する事は本會もやるがむしろ支會の仕事の方が多い。然かも支會で徴集する方が自分の支會へ赴任して來た者から徴集するので洩れ無く取れる」。議長は「本會に徴收規定ありや」と質し林理事は「内規がある。校又は同窓會員の世話に依り、就職又は轉任した者の月給の一割位を寄附して貰ふと云ふのである。半額支會へ交附しても洩れ無く取立てゝ貰へばその方が本會の收入は多くなるから本會としては差支無い。支會も便利と云ふならばそうしてもよいと思ふ」と答へ議長は「内規を改正せねばならぬ。本會は差支ないと云ふが支會は如何」と諮り滿洲湯川秀夫氏其他の贊成あり倉澤理事より「各支會に公平且つ平等にする事は困難と思ふ。今迄は出す人と出さぬ人があつた。學校で推薦したから出す、しないから出さぬと云ふ樣に區々であつた。之を決定しても實現出來ぬ支會がありはせぬか。決定したら各支會が必ず實行して欲しい」と駄目を押し議長は「十は提案の如く内規を改正する事とする」を諮り可決となる。

十六、昭和十二年度本會歳入出決算並に財産目錄承認の件（本會）

林理事より次の如く説明あり（別表參照）「歳入決算が豫算より少なかつたのは蠶絲學雜誌收益金三百圓が收入しなかつた事に依る。之は先に報告の如く學雜誌の經營を猪坂直一氏に依頼し編輯費として三百圓を受取る契約であつた。然るに其後紙代印刷代騰貴を自他共に認めたので契約を訂正、收益金を受けぬ事とした。之の點承諾願ひ度し。支出の内事業費の一四九圓減少せるは蠶絲學雜誌の收益金なき爲め編輯費を節約せる結果である。海外留學資金の内四八圓七五錢は遠藤先生著書の印税である。遠藤先生からは現在迄で約千五百圓の寄贈を受けた事となる。研究奬勵資金本年度分五十圓は使はなかつたので其の儘積立てた」。

之に對し仮島理事より收支決算書並に財産目錄を監査せるに正確なる旨報告あり續いて議長は「向上資金と向上基金の區別如何、又之れを別紙に書いた理由如何」と質問し林理事は「資金は就職其他の仕事に全額使用するもの基金は前年度の利子を資金に使用するものである。別紙とせるは特別會計の樣に取扱つたのである」と答へ更に議長は「特別會計にしないと都合が悪いのか」と質し林理事は「極めて樂に使ひ度いと云ふ意味でそうしたのである」と答へ質問を打切り議長より滿場に諮り原案通り可決となつた。

最後に蠶絲學雜誌經營者猪坂直一氏より蠶絲學雜誌決算が承認されたに就て當の責任者として「一昨年の代議員會で蠶絲學雜誌經營の重責を荷つた當時既に紙價が騰貴してゐたので三百圓出せるかどうか譯らぬとその席上で云ふたと記憶してゐる。計畫を提示したのは一昨年の春でそれが秋に實現した爲め三百圓捻出の自信を失つた。兎に角やつて見ようと引受けたが更に重大な變化即ち郵税五割値上があり蠶絲學雜誌は雜誌で無く書籍の取扱ひを受ける爲め第四種又は小包で送らねばならず非常な增額となつた。その結果非常な缺損となつたが今更泣言は云はぬ。それでも幸ひ會員其他の御後援に依り經營の根本に龜裂が入らずに濟んだ理事會で今回編輯費を出さなくてもよくなつた事を、更に本日承認を得て感謝に堪えぬ。同時にお詫び申上げる。今後事變の發展と共に經營は益々困難を加へると思ふ。懸命の努力を拂ふ積りであるから同窓各位の絶大なる御聲援を御願ひする。たとへ生絲の國を廢刊するも蠶絲學雜誌の方は繼續する考へである。今後共宜敷お願ひする」と御禮、御詫び旁々懇請の言葉があつた。

十七、昭和十二年度歳計剩餘金處分の件（本會）

林理事より次の如く説明あり（別表參照）「剩餘金六百四十七圓二十七錢の内百五十圓を向上資金に繰入れ活動の資とし百五十圓を役員交際費とし殘り三百四十七圓廿七錢を次年度に繰越し度い」。之は質疑無く直ちに原案通り可決となつた。

十八、會費未納整理に關する件（本會）

林理事より次の如く説明あり「年々未納會費を整理してゐるのに今回敢て之の問題を提出したのは次の理由に依る。先年の代議員會に於て長年會費未納者には名簿、千曲時報其他の送付を中止してもよいと云ふ事を協賛願つた。然し今迄は經費に餘裕があつたので送つてゐたのであるが應召者の爲めに收入減少し支出增加し經營困難になつた。それで經費節約の必要から協賛された事を實施し送らぬ事を相談した。然しそれを實施する前に支會長へ會計から通知し未納會費の徴集に御協力願ひそれでも尚納入せぬ者には送らぬ如くする。その爲めに提案せるもので支會長宛御依頼したら御協力願ひ度いものである」。之に對し議長より「十八に就ては各支會長に於て當該支會員の會費未納が無い樣努力する事とする」を諮り可決となる。

二、針塚先生謝恩記念資金に關する件（東京）

十三、針塚賞設置に關する件

針塚前校長の高恩を永久に記念し併せて千曲會々員の活動を助長促進せんが爲めに前校長在職中の積立基金全部を擧げて「針塚基金」と稱し之が利子を以て「針塚賞」を設置し上田蠶絲專門學校傳統の所謂針塚教育の主旨を發揚せりと認めらるゝ功績顯著なる會員を表彰する事。（埼玉）

二十、本會々則改正に關する件（本會）

二十一、基本財産處分に關する件（本會）

二に付き提出者東京八木誠政氏より「千曲會大會の時針塚先生に二万圓醵出し内一萬圓で記念事業をする事となつた。それが議題となつた場合には使途に就き意見があつたのであるが昨夜の懇談會に於て諒解が成立したから徴回しても差支ない」と徴回の意を洩し蒲生理事長は「針塚先生謝恩金の方は先刻私及林理事の事業報告で説明したから説明の要は無いが記念事業の方の本會案を説明する。それは五千圓を基本金より支出し針塚記念基金とし之の利息百五十圓乃至百六十圓で針塚賞を與へる。授與方法は尚研究を要するが大体の腹案は審査規定を作り審査委員を選任し賞金又はメタルを與へ受賞資格は次の如き案がある。（一）論文著書等に於てその成績卓越し蠶絲業に多大の効果を齎すと認める者（二）優秀なる發明發見をなし我國蠶絲國策に沿ひ効果ありたる者（三）本會並本校に多大なる功勞ある學生の在學中學業品行共に優秀なる者（四）學校に依頼し卒業せんとする者」。

十三に就ては提出者埼玉門平潤一郎氏より別に附加説明無く之に對し林理事より「基本金は年々積立てその利子は通常合計へ支出してゐる。即ち通常會費は三千圓足らず、それに基本金利子千圓弱、其他を加へて五千圓で通常會計を維持してゐる。然るに埼玉案の如く基本金全部を針塚記念資金に向けると通常會計はやつて行けぬ事となるから贊成出來ぬ。基本金は廿五周年記念事業に於て千曲會館に七千圓支出し豫定より少くなり困難して

ねる處へ加へて低金利となり益々苦しくなつた。然るに今回記念基金に五千圓謝恩金に千圓（林理事の事業報告の項參照）支出するので基本金は六千圓減少し殆んど實行不可能となつた。依つて基本財産處分案と共に會則改正を提案した次第である。それは從來會費を十七年完納せる者は一時金二十圓收めると此後終身納入しなくてもよかつたが之を一年增加し十八年とする案である」と埼玉案の反對旁々二十及廿一の說明を行つた。二と十三の問題は本會提出の二十廿一と關聯する故一括し第一委員會附託となり審議の結果、委員長小川保氏代理山本岩三郎氏より「謝恩金は基本會案通り一万圓とする。記念資金は基本金より五千圓捻出しその利子で針塚賞を與へる事は原案通り。運用に於ては會員及學生を含む事とする。五千圓の利子は僅少であるから運用は毎年でなくてもよい。二十の會則改正の件及廿一の基本財産處分の件は原案通りとする」との報告あり委員會案の如く可決した。可決となつた時蒲生理事長より「唯今勝又藤夫氏より針塚賞に對する意見の速達便が到着した故報告する。それは千曲會には奬學資金がある故針塚賞は不要である。その金を以て蠶絲科學の尖端のみを經め記念刊行物として欲しいと云ふ意見であるが如何」と報告し議長は「委員會案の如く決定するか或は之に附加するか」と諮り委員會案の如く決定した。

針塚先生謝恩金記念基金繰入の件（本會）

緊急動議として林理事より左の如く提案說明あり「代議員會の劈頭針塚先生に謝恩金目錄を贈呈したのであるが唯今先生から理事者に對し謝恩金の全額を針塚記念基金に繰入れて欲しいとの御申出があつたので私から謝恩金は謝恩であるから是非御受納願ひ度いと懇請した處、先生は然らば一部を基金として寄附し度いから協議して欲しいと云はれた。依つて之の問題を緊急動議として提出する次第である。之はどうしたらよいか。理事者としては基金に頂き度くはない、全部御受納願ひ度く希望してゐるがどうか」。之に對し議長は「第一委員會に於て併せて審議願ひ度い」と云ひ齋藤理事より「即決とせられたい」と提議あり議長は「何れがよいか」と諮り滿場一致即決即ち辭退する事と決した。

五、滿支産業調査會活動促進に關する件（北信）

九、滿支方面の就職開拓を圖る爲め會員中有力者派遣に關する件（岐阜）

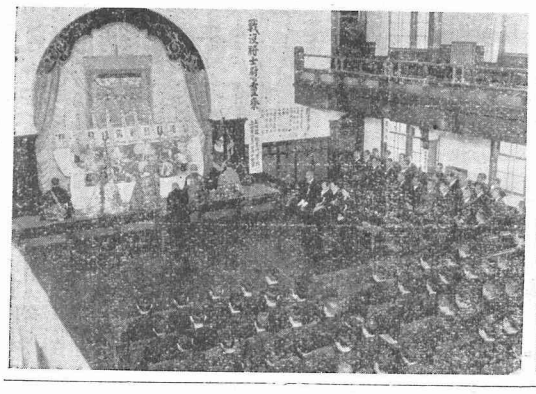
五に對し提出者北信山本岩三郎氏より左の如く說明あり「之の問題には本會に對し要望と質疑がある。滿支産業調査會設置の意志は滿支の産業調査の外大陸へ會員に進出發展させたいと云ふ目的であつた。然るに其後の活動狀況は遺憾にてむしろ怠慢と考へられる。苟も同窓會で決議したものは必ず遂行し實行出來ぬ時の發展に於ても他校にて對し本校は非常に引目を感じてゐるは遺憾である。決議した事が實行されぬ事情が何處にあるか。その經費の點も聽き度い。多忙でやれないと云ふ事情があるのでは無いか。活動を充分にして欲しい」。

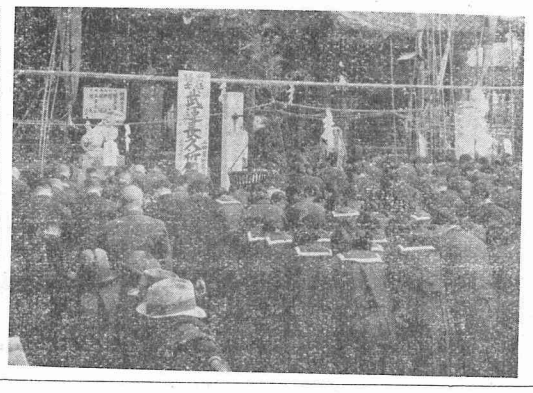
九に對し提出者岐阜間宮成吉氏より次の如く說明あり「派遣するのが目的である

代議員會出席者氏名

（順序不同）

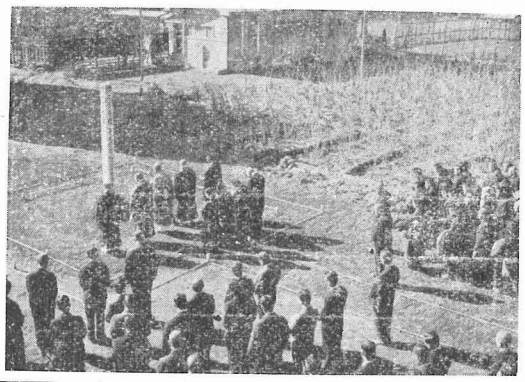
宮城支會　古山宗八
山形支會　宮崎秋雄
福島支會　安部和
群馬支會　岡部彌平　横山宗次
埼玉支會　石坂虎次郎　三宅玉留
東京支會　門平潤一郎　高畠秀男
神奈川支會　松村季美　牧道男
越佐支會　八木誠政
北陸支會　和田幸一
北信支會　高木三治　小笠原振一
二宮九二二　深谷正一
菅原勇治
久保田正樹　峰村壽命





安筑支會　永井眞吉
諏訪支會　小林勳
龍川支會　阿久澤清
岐阜支會
靜岡支會
近畿支會
茨城支會
栃木支會
山陽支會
宮崎支會
滿洲支會
丹綾支會

理事長　山本岩三郎
理事　石井謙三
監事　鹽原克巳
小林茂樹
評議員　間宮成吉
岸勝彌
在田會員　伊藤友次郎
佐藤義助
新庄哲二郎
小川保
穂坂小牧
湯川秀夫
太田良信
蒲生俊興
松村季美
倉澤美德
齊藤菊雄
飯島正胤
笠原正巳
八木誠政
岡部彌平
鹽原克巳
香山清和
荻原清治
山口定次郎
小見益男
猪坂直一
北島正生
宮坂收
山崎常錄
山田良人
町田博
征矢克郎
湯原諄
小澤利雄



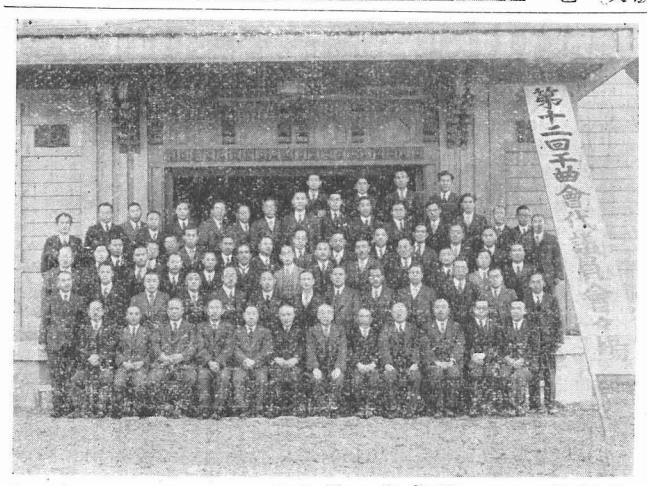
中澤忠
林貞三
野口新太郎
高木三治
岸勝彌
二宮九二二
小宮山太助
小松忠一郎
窪田潤
須田圭二
細川三郎
永田平
山崎壽
平尾孝
傳田靜夫
古平庄衛
小林敏
宮下丈夫
小林尚一
中澤勝也

記念寫眞御希望の方へ

千曲會第十二回代議員會記念撮影（八ッ切大）御入用の方は送料共金四拾錢相添へ直接上田市馬場町三井寫眞館へ御申越下さるか又は上田蠶絲專門學校内須田圭二宛御下命下さい

代議員會記念撮影説明

第一列右より　二宮九二二　八木誠政
菅原勇治　高畠秀男　阿形先生
針塚先生　校長先生　松村季美
穂坂小牧　小川保　高木三治
蒲生俊興
第二列右より　小林勳　宮下丈夫
門平潤一郎　峰村壽命　中澤忠
石井謙三　久保田正樹　新庄哲二郎
岸勝彌　古山宗八　岡部彌平
野口新太郎
第三列右より　小林貞三
小林茂樹　和田幸一
石坂虎次郎　間宮成吉
阿部和　飯島正胤
齊藤菊雄　伊藤友次郎
窪田潤
倉澤美德
第四列右より　山田良人
香山清和　横山宗次
小宮山太助　佐藤義助
永井眞吉　鹽原克巳
小林尚一　小笠原振一
永田平　太田良信
第五列右より　須田圭二　久保藤一
北島正生　小澤利雄　古平庄衛
町田博　山口定次郎　笠原正巳
荻原清治　湯原諄　阿久澤清
深谷正一　傳田靜夫　三宅玉留
宮崎秋雄　小松忠一郎　山崎壽
第六列右より　征矢克郎　細川豊
宮坂收　茅野功



故陸軍歩中尉　增田孝
故陸軍輜重兵曹長　笠原松平
故陸軍歩兵軍曹　望月榮作
故陸軍歩兵軍曹　手塚達郎
故陸軍歩兵軍曹　服部令吉
故陸軍歩兵軍曹　岡宮辰夫
故陸軍歩兵伍長　藤澤喜一郎
故陸軍歩兵伍長　中島健爾
故陸軍輜重兵上等兵　新村幸三
故陸軍輜重兵上等兵高木晋

母校關係出征兵士祈願祭

母校並に千曲會主催にて十一月二十三日午前九時職員生徒傭人並に代議員會に參集の同窓生は常入區の科野大宮社前に整列、校長先生が玉串を奉獻し母校關係出征將士の武運長久を祈願した。

母校關係出征戰沒者慰靈祭

十一月廿三日午前十時より講堂に於て母校並に千曲會主催にて母校關係者にして出征戰沒せられたる英靈十柱の慰靈祭を施行した。講堂正面に作りたる祭壇に十氏の遺影を掲げ御遺族は故手塚達郎氏嚴父初十郎氏、故中島健爾氏母堂はや氏、故岡宮辰夫氏令姉靜子氏、新村幸三氏母堂の四氏が出席され其他職員、生徒、傭人並に代議員會に參集の同窓生等參列の下に井上校長が司祭者としての挨拶に依り開始され別所常樂寺住職半田孝海師等の讀經、司祭者、御遺族、同窓生代表蒲生俊興氏、生徒代表長末方夫（靈三）君の燒香、司祭者の弔詞、半田孝海師の法話、最後に手塚初十郎氏が御遺族を代表して謝辭を述べられて終了、續いて講堂西側空地に於て支那事變殉國英靈供養塔の建立式があり半田孝海師等の讀經、御遺族、井上校長の燒香ありて十一時半嚴肅裡に終了した。祭祀英靈は左の如くである。

代議員會懇親會

代議員會終了後直ちに即ち午後六時半から市内綠町うな藤に於て代議員會懇親會を開催した。會員の出席は五十四名に達し母校より十三先生の御臨席を得た事は嬉しかつた。宴會は猪坂直一氏の名口上に依つて開始され千曲會寄附の美妓八名酒間を斡旋し同窓生同志、先生と生徒お互に久濶を謝し、或は回懐談に時を過し歡を盡して八時半頃針塚先生發聲にて萬歳三唱散會した。出席者氏名は左の如くである。（敬稱略、順序不同）

母校職員
井上柳梧　針塚長太郎　阿形輝司
石倉新十郎　遠藤保太郎　佐藤利一
原田親雄　岡德治郎　佐藤春太郎
古谷榮藏　小泉所　依田啓藏
久保藤一

卒業生
蒲生俊興　山口定次郎　宮坂收
林貞三　荻原清和　野口新太郎
香山清和　小林尚一　小見益男
小松忠一郎　湯原諄　倉澤美德
須田圭二　宮下丈夫　細川豊
阿久澤清　永田平　笠原正巳
石井謙三　岡部彌平　石坂虎次郎
八木誠政　岸勝彌　古山宗八
中澤忠　高木三治　菅原勇治
二宮九二二　佐藤義助　齊藤菊雄
高畠秀男　久保田正樹　猪坂直一
飯島正胤　峰村壽命　山本岩三郎
小宮山太助　永井眞吉　鹽原克巳
宮崎秋雄　傳田靜夫　細川三郎
山崎壽　伊藤友次郎　湯川秀夫
松村季美　北島正生　茅野功
牧道男　中澤勝也　原田種龜
横山宗次　小林勳　栗林悅

（寫眞上段右は武運長久祈願祭、上段左は戰歿將士慰靈祭、中段は供養塔建立式の光景である）

昭和十二年度千曲會通常會計收支決算書

歳入

一金四千九百九圓六拾九錢也　歳入決算高
一金五千四拾四圓也　歳入豫算高

歳出

一金四千貳百六拾貳圓四拾貳錢也　歳出決算高
一金五千四拾四圓也　歳出豫算高
差引殘高金六百四拾七圓貳拾七錢也　剩餘金

歳入

決算

決算説明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	決算額	種目	本年度決算額	本年度豫算額	比較增減	附記
一、會費	通常會費	三、三〇八、一〇〇	通常會費	三、三〇八、一〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	一〇八、一〇〇	
	終身會費	三二五、〇〇〇	終身會費利子	三二五、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一四、四〇〇	
			終身會費成崩高		一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	
二、基本金	準會員會費	八八、八〇〇	準會員會費	八八、八〇〇	九〇、〇〇〇	三、八〇〇	
	基本金利子	七〇〇、〇〇〇	利子繰入	七〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇		
三、雜收入		五九四、八四〇		五九四、八四〇	八八〇、〇〇〇	△二六五、一六〇	
	蠶絲學雜誌收益金		蠶絲學雜誌收益金		三〇〇、〇〇〇	△三〇〇、〇〇〇	
	印税		印税		一〇、〇〇〇	△一〇、〇〇〇	
	廣告料	四〇一、九〇〇	廣告料	四〇一、九〇〇	四〇〇、〇〇〇	一、九〇〇	
	雜收入	一九二、九四〇	雜收入特定寄附金利子	一九二、九四〇	一五〇、〇〇〇	四二、九四〇	
四、寄附金	寄附金	五二、三〇〇	一般寄附金	五二、三〇〇	二七、〇〇〇	二五、三〇〇	
五、繰越金	繰越金	二五四、四五四	繰越金	二五四、四五四	二五四、四五四		
合計		四、九〇九、六九〇		四、九〇九、六九〇	四、九〇九、〇〇〇	△一三四、三一〇	

歳出

決算説明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	決算額	種目	本年度決算額	本年度豫算額	比較增減	附記
一、基本金繰入高	基本金繰入高	六〇〇、八八〇	基本金繰入高	六〇〇、八八〇	五八〇、〇〇〇	△二〇、八八〇	
二、事務所費	俸給	八四五、八一一	專任幹事給	八四五、八一一	五八〇、〇〇〇	△二六五、一九一	豫備費ヨリ流用
		二六二、〇〇〇		二六二、〇〇〇	五〇、〇〇〇	△二六、〇〇〇	
合計		四、二六二、四三五		四、二六二、四三五	四、四四〇、〇〇〇	△一七八、一五八	

基本金、別途積立金、海外留學資金、研究奬勵資金、向上基金、向上資金（繰入）郡合依ニリ省略ス　貸借對照表、財産目錄ハ

昭和十二年度通常會計剩餘金處分法

一金六百四拾七圓貳拾七錢也　剩餘金
之ヲ處分スルコト左ノ如シ
一金百五拾圓也　向上資金（繰入）
一金百五拾圓也　役員交際費
一金參百四拾七圓貳拾七錢也　翌年度通常會計ヘ繰越金

款	項	決算額	種目	本年度決算額	本年度豫算額	比較增減	附記
一、會費	雜給	三七、五〇〇	書記給	三八二、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	△一八、〇〇〇	
	旅費	一〇、〇〇〇	傭人手當賞與	一七、五〇〇	二〇、〇〇〇	△二、五〇〇	
	交際費	一三五、〇〇〇	役員交際費	一三五、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	△一五、〇〇〇	
	需要費	一六四、〇三一	備品消耗費	一六四、〇三一	一五〇、〇〇〇	△一四、〇三一	
二、基本金	集金費	三七、二九〇	會費集金料	三七、二九〇	一九七、二九〇	△一六〇、〇〇〇	
三、會議費	代議員會費	二六三、一七〇	未納會費整理費	二六三、一七〇	三〇〇、〇〇〇	△三六、八三〇	
	役員會費	二五、一三〇	雜費	二五、一三〇	一七〇、〇〇〇	△一四、八七〇	
			通信費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			消耗品費		四一、六六〇	△四一、六六〇	
			備品費		五一、五〇〇	△五一、五〇〇	
			役員交際費		一六四、〇三一	△一六四、〇三一	
			旅費		一三五、〇〇〇	△一三五、〇〇〇	
			賞與		一〇、〇〇〇	△一〇、〇〇〇	
			傭人手當		二、五〇〇	△二、五〇〇	
			書記給		三七、五〇〇	△七、五〇〇	
四、事業費	會報費	一、九〇五、六三〇	雜費	一、九〇五、六三〇	一、七〇〇、〇〇〇	△二〇五、六三〇	
			役員旅費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			雜費		六〇、〇〇〇	△六〇、〇〇〇	
			旅費		一二〇、〇〇〇	△一二〇、〇〇〇	
			補助費		一七〇、〇〇〇	△一七〇、〇〇〇	
			雜費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			印刷費編輯費		一四〇、〇〇〇	△一四〇、〇〇〇	
			雜費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			送料		一七〇、〇〇〇	△一七〇、〇〇〇	
			印刷費調査費		一五〇、〇〇〇	△一五〇、〇〇〇	
			雜費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			送料		七〇、〇〇〇	△七〇、〇〇〇	
			雜費		一五〇、〇〇〇	△一五〇、〇〇〇	
			蠶絲學雜誌費		三〇〇、〇〇〇	△三〇〇、〇〇〇	
	講演講習費	一五一、八八〇	雜費	一五一、八八〇	一〇〇、〇〇〇	△五一、八八〇	
			師費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			雜費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
			研究費		五〇、〇〇〇	△五〇、〇〇〇	
			各部會費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
	奬勵費	五〇、〇〇〇	共濟費		五三、〇〇〇	△五三、〇〇〇	
			弔慰金		四八、〇〇〇	△四八、〇〇〇	
			調査費		一〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
	共濟費	五三、〇〇〇	補助費		一五〇、〇〇〇	△一五〇、〇〇〇	
	調査費		交付金		四九六、九四四	△四九六、九四四	
	補助費	一五〇、〇〇〇	豫備費		三、九四四	△三、九四四	豫備費ヨリ流用
五、補助費							
六、交附金	交付金	四九六、九四四					
七、豫備費	豫備費						
合計		四、二六二、四三五		四、二六二、四三五	四、四四〇、〇〇〇	△一七八、一五八	

昭和十四年度千曲會通常會計收支豫算書

一金四千九百八拾圓也　歳入豫算
一金四千九百八拾圓也　歳出豫算

歳入

豫算

豫算説明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	比較增減	附記
一、會費	通常會費	三、〇四〇、〇〇〇	通常會費	三、〇四〇、〇〇〇	三、〇一〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	
		二、七〇〇、〇〇〇		二、七〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇		
	終身會費	二五〇、〇〇〇	終身會費利子	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	
			終身會費成崩高	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇		
	準會員會費	九〇、〇〇〇	準會員會費	九〇、〇〇〇	八五、〇〇〇	五、〇〇〇	會員ノ增加ニヨル
二、基本金利子	基本金利子	九〇〇、〇〇〇	利子繰入	九〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	基本金ノ增加ニヨル
三、雜收入	蠶絲學雜誌收益金	六六〇、〇〇〇	蠶絲學雜誌收益金	五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	△五〇、〇〇〇	
	印税	一〇、〇〇〇	印税	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		
	廣告料	四三五、〇〇〇	廣告料	四三五、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇	内譯時報名簿 三〇〇、〇〇〇 二五、〇〇〇
	雜收入	一七五、〇〇〇	預金利子收	一七五、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	内譯時報名簿其他 一〇〇、〇〇〇 五〇、〇〇〇
四、寄附金	寄附金	八〇、〇〇〇	指定寄附金	八〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	
			一般寄附金	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇		
五、繰越金	繰越金	三〇〇、〇〇〇	繰越金	三〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇		
合計		四、九八〇、〇〇〇		四、九八〇、〇〇〇	四、八二〇、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	

歳出

豫算

豫算説明（△印ハ減ヲ示ス）

款	項	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	比較增減	附記
一、基本金繰入高	基本金繰入高	五四〇、〇〇〇	基本金繰入高	五四〇、〇〇〇	五四〇、〇〇〇		
二、事務所費		一、〇七一、〇〇〇		一、〇七一、〇〇〇	一、〇三一、〇〇〇	四〇、〇〇〇	通常會費增加セヌ爲前年度ト同一ニス
三、會議費	代議員會費	三八〇、〇〇〇	代議員旅費補助	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇		
			雜費	二八〇、〇〇〇	二八〇、〇〇〇		
	役員會費	一五、〇〇〇	役員旅費	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇		
四、事業費	會報費	二、一〇〇、〇〇〇	印刷費	一、二四八、〇〇〇	一、二七〇、〇〇〇	△一九〇、〇〇〇	會員ノ增加ニヨル
			編輯費	九五四、〇〇〇	九三〇、〇〇〇	二四、〇〇〇	
	名簿費	四六七、〇〇〇	雜送料	三三、〇〇〇	三五、〇〇〇	△二、〇〇〇	會員及編輯費ノ增加ニヨル
			印刷費	四六七、〇〇〇	四八〇、〇〇〇	三二、〇〇〇	
			編輯費	三三、〇〇〇	三五、〇〇〇	二、〇〇〇	
			雜送料	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		
			雜費	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇		
	役員會費	一五、〇〇〇	役員旅費	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇		
	雜費	五五、〇〇〇	雜費	五五、〇〇〇	五五、〇〇〇		
五、補助金	補助金	一五〇、〇〇〇	補助金	一五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇		
六、交附金	交附金	四五九、〇〇〇	交附金	四五九、〇〇〇	四五九、〇〇〇		
七、豫備金	豫備金	二八〇、〇〇〇	豫備金	二八〇、〇〇〇	二八〇、〇〇〇		
調査費	調査費	一〇、〇〇〇	調査費	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		
共濟費	共濟費	一一〇、〇〇〇	共濟費	一一〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇		
奬勵費	奬勵費	一〇〇、〇〇〇	奬勵費	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇		
講演講習費	講演講習費	五、〇〇〇	講師費	三、〇〇〇	三、〇〇〇		
			雜費	二、〇〇〇	二、〇〇〇		
雜蠶絲學雜誌費	雜蠶絲學雜誌代	一四〇、〇〇〇	雜蠶絲學雜誌	一三〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	蠶絲學雜誌十部購入代
			雜費	五、〇〇〇	五、〇〇〇		
合計		四、九八〇、〇〇〇		四、九八〇、〇〇〇	四、八二〇、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	

本會記事

本會日誌

十一月十七日　第十二回代議員會招集狀發送す。

十一月十八日　濱香三氏來校に付滿洲方面に關する懇談會開催す。

十一月二十二日　監事會開催本會々計事務全般に亘り監査を行ふ。

十一月二十三日　第十二回代議員會開會す。

十一月二十五日　故笠原松平氏の公葬執行せらる。林理事會葬せり。

十一月三十日　兒玉慶次氏（絲八）井出末馬氏（蠶十二）逝去せらる。電報にて弔意を表す。

十二月四日　倉澤理事蠶絲業調査のため支那、滿洲朝鮮方面へ出張す。

支會役員更迭

北陸千曲會に於ては十一月十三日總會開催せられ左の通り役員改選ぜらる。

支會長　菅原勇治
副支會長　坂田榮雄
幹事　苅田恭一　本田圭吉　土屋茂一郎　高瀬毅一　北澤延榮　高品喜一郎
代議員　菅原勇治

龍川千曲會に於て左の如く新任せられたり。

支會長　小林茂樹（絲一）
副支會長　森本爲之助（蠶七）

本會基本金中へ御寄附

曩に名譽の戰死を遂げられし故新村幸三氏御遺族より左の通り本會基本金中へ金貳拾圓也御寄附せらる。洵に感謝の至りに堪へず御厚志に對し本紙上を以て御禮申上ぐる次第なり。

謹みて申上げます。夫幸三出征中は一方ならぬ御厚情を賜はり洵に難有感謝致して居りました處武運拙なく北支那の戰野に散華致しました。先頃村葬の節は御懇篤なる御弔詞に添へ過分なる御供物を頂き御芳志厚く御禮申上げます。多數の方々の御親切なる御同情を得まして悲しき中にもこの上なき力を得て過して居ります。尚此の上共一層御鞭撻の程御願ひ申上げます。本日些少にて寔に恐入りますが金一封千曲會の基本金として御受納いたゞき度くと存じ同封致しました故何卒御受取り下さいませ。先は取敢ず御禮旁々御案內までに申上げます。かしこ

十月二十九日　新村節子

千曲會御中

加藤好男氏歸期

本年三月末人造纖維視察の爲め外遊の途に登られたる新興人絹株式會社取締役技師長加藤好男氏（絲三）は獨逸に於て斯業の視察に大部分の時を過され其他伊佛和瑞英の各國を見て米國經由にて十一月三日橫濱着にて歸朝されたが廿五日母校に歸朝挨拶旁々數日の靜養に來られ廿六日には母校在勤の同窓生と晚餐を共にし彼地の科學の進步、研究者の熱人情等に就き話され得る處頗る大であつた。

滿支產業調査會座談會

新天地の產業を調査屢々研究會を開催して來た吾が滿支產業調査會では十一月十八日滿洲國產業部濱香三氏（紡三）の來校された機會に座談會を午後三時より千曲會館樓上に開催し校內外同窓生數十名參集同氏を圍みて滿洲の柞蠶業紡織業等の現狀を聽取、得る處頗る大であつた。然し急の催しにて通知が徹底せず、附近の會員丈しか來れなかつた事は殘念であつた。

倉澤教授渡支

戰塵漸く鎭まり東亞新秩序への諸工作が攻究されてゐる折柄彼地の蠶絲業振興は吾々の急務である。今回母校倉澤美德教授は母校並に滿支產業調査會の派遣員として中北支の蠶絲業及び滿洲の柞蠶業視察の爲、十二月四日午後十時三十六分上田發、長崎を八日午前十一時發の船で渡支されることになつた。豫定日程は現地の狀況によつて左右されることとて不明であるが、大体先づ上海に上陸して其近郊並に蘇州、抗州等中支蠶絲業中心地及び戰跡を視察、之より海路にて青島に上陸北支一帶を視察、陸路にて滿洲に入り柞蠶業地方並に一般產業の現狀等を視察朝鮮經由にて明年一月中旬頃歸校の豫定であると云ふ。

御通知

謹啓、各位には時下益々御健祥の段慶賀の至りに御座候。陳者小生今回急に滿支視察に派遣されれ十二月四日出發、年越し、迎春は彼地にて致す樣相成り、一月中旬頃迄は自宅不在にて且つ長男の喪中に付き新年の御挨拶は缺禮致可候間豫め御通知申上候。敬具

十二月四日　倉澤美德

針塚長太郎先生謝恩記念資金申込報告（第六回　十一月卅日現在）

金參拾圓也　森山一二郎
金貳拾圓也
金拾八圓也
金拾五圓也　高橋善吾　藤井周　二木猪藏　川合軍之助　小湊潔
金拾貳圓也　坂田武　吉津柏
金拾圓也　日比野一夫　結城鎭男　牧野弘
金九圓也　川島熊太郎　武本本治　竹內博雄　小笠原精三　山內龍一　酒井淳夫
金六圓也　深谷正一　中澤利三郎　藤井四郎　杉浦卓三　三浦明義　荒木愼藏　寺島雅彥　松崎武雄
金五圓也　本田圭吉
金參圓也　金柄龍　戶部正久　林宇一　大塚富雄　立木一千　高木信雄　小林みよ　齋藤生實　小澤正一
金貳圓也　田中市江
金壹圓也　松田豐子

兒玉忠雄　吉澤武夫　佐藤種雄　榊原春彥　市川恕平　峰村愼一郎　久保田昌人　大谷內三衞　手塚雄一　本間國夫　小林勳　笠原重繩　加藤喜一郎　廣井俊一　岸益吉　土岐宣治　根岸丑之輔　今村良鄕　北澤孝一　勳　使河原藤之助　石濱正巳　神保喜久（追加）　石附文吾　都筑禮二　深田銀作　西澤重光　平尾孝平　森川博　三木辰雄　高松珍夫　志賀覺　田村朝之助　林周藏　石田次夫　貞包新（追加）　梶田隆　富田乙松　川村千馨　近藤淸一　宮下和三郎　土屋勉　三原磊藏　柳澤柳二　寺井子藏　佐谷戶健次郎（追加）　中村ふみ

水野健吉　片倉二郎　菅澤隆三　尾見祐八　小林繁　一志藏人　黑田誠一郎　大高雄三　又木善義　笠原豐　式田定千代　中村由枝　瑞田得一　安島義久　野口活也　宮堀俊雄　藤井料　關嘉四郎　片岡清治郎　內川勇　山崎傳　清水洸　浦生勇一　叶澤純一　小口伊祐　神林浩三　望月太一　星野拓弘　加々井精喜　伊藤敏之　金子梓郎　北澤琢郎　川久保元　諸岡市郎　阿久津伊平　竹內正司　飯島六

右金計金壹千〇四拾七圓也
累計金壹万〇百參拾貳圓五拾錢也

（訂正）十一月千曲時報に發表中申込金九圓也纈谷正男殿は金六圓也と訂正し右合計金壹千參百〇五圓也を金壹千參百〇貳圓也と累計金九千〇八拾五圓五拾錢也と訂正す。

針塚長太郎先生謝恩記念資金受領報告（第七回　十二月一日現在）

金參拾圓也　鶴田定平　森山一二郎
金貳拾四圓也
金貳拾壹圓也

沖濤治　上野榮仁　片倉二郎　本間直人　山本岩三郎

水野健吉　神保喜久　濱井壽夫

久保田正樹
金貳拾圓也
金拾八圓也　峰村壽命　榊原春彥
金拾五圓也　南林孝三　峰村愼一郎　小野修二　河井正　大高雄三　市川恕平　三好彌市　小林繁　本間國夫　久保田昌人
金拾貳圓也　笠原重繩　笠原豐　牧野春雄
金拾圓也　式田定千代　牧野弘　加藤喜一郎
金九圓也　石附文吾　丸山勳　廣瀨廣　宇多田泰熊　野口治也　伊藤猛
金六圓也　山崎傳　松崎武雄　神林浩三　浦生勇一　土岐茂次　杉浦卓三　瀧澤幸　丸山丁吉　都筑禮二
金五圓也　星野拓弘　北澤周一　竹內善吾（完納）
金參圓也　土屋勉　高野賢造　多川澄平　加々井精喜　貞金新　井上克已　水野義男　宮下和三郎　國貞快男　富田乙松　日幡英一
金貳圓也　金澤貞子
金壹圓也　伊藤ハル　松田豐子

杉野壽一　田附卯一郎　奧田達雄　小泉清明　細川護　皆川二郎　彼末武猪　藤井國藏　船越重勝　千葉達人　菅澤隆三　高橋善吉　新庄哲二郎　和田晋　藤本衞佐雄　今井叓　佐村和夫　土岐宣治　日比野一夫　岸益吉　宮坂收　宮城博　鈴木雄七　小松茂久　石濱正已　山岸寅雄　關嘉四郎　小林敏　瀧澤正一　荒木愼藏　三浦明義　片倉清治郎　猪瀨親二　西澤重光　工藤見吉　三木辰男　町田博　池田善三（完納）　林周藏　結城鎭男（一回分）　金子梓郎　川久保元　北澤琢郎　齋藤生實　乾正　橋本嵩　諸岡市郎　戶部正久　近藤清一　梶田陸　市原政治　塚田典次　林正枝　中村ふみ　飯島六

佐谷戶健次郎　宮前邦雄　都筑賢吉　手塚雄一　須田國之助　竹內虎夫　林新一　一志藏人　金崎眞英　依田武治　柳澤忠次　大谷內三衞　黑田誠一郎　安川寬　若井弘　坂田武　久保田松藏　小林國造　瑞田得一　北澤孝一　根岸丑之輔　小笠原精三　宮堀俊雄　鈴木玄九　武本本治　酒井淳夫　關博夫　寺島雅彥　藤井四郎　望月太一　米田俊雄　高松珍夫　根津健　半田辰猪　中澤利三郎　淺川茂樹　本田圭吉　尾見祐八　金丸八郎　阿久津伊平　小林みよ　柳澤柳二　竹內正司　三原磊藏　寺井子藏　兒玉逸夫　立木一千　關三四郎　阿形一三　佐藤祐三　田中市江　松本よき子　渡邊きよ

右合計金壹千六百拾四圓也
累計金七千參百六拾圓五拾錢也

（訂正）十一月號千曲時報に發表中金九圓也纈谷正男殿分は金六圓也が正當に付訂正し金參圓也藤井宗雄殿分を十一月號分に加入合計累計は發表通り。

會費領收（十一月卅日現在）

昭和十三年度會費金四圓也

佐谷戶健次郎（蠶一）　齋藤格次（蠶三）　糟谷遠三郎（蠶六）　坂田正贇（蠶八）　深田銀作（蠶十二）　仲內靜（蠶十三）　市川清（蠶十三）　津野善衞（蠶十三）　平野秀男（蠶十五）　降旗孝（蠶十五）　今井和人（蠶十六）　中澤二郎（蠶十六）　瀧口昇（蠶十七）　西澤重光（蠶十七）　宮堀俊雄（蠶十七）　三瓶常四郎（蠶十八）　宮澤卿（蠶十九）　山崎勝己（蠶廿）　石原滿洲夫（蠶廿二）　瀧澤幸（蠶廿二）　守屋一郎（蠶廿二）　橫內一郎（蠶廿四）　清水良一（蠶廿六）　山本藏（絲二）　長田保美（絲九）　山岸寅雄（絲十）　石濱正已（絲十）　鹽田健介（絲十一）　田口榮治（絲十一）　渡邊康平（絲十三）　角替越夫（絲十四）　三木辰男（絲十六）　矢島陸之助（絲十七）　高須正高（絲十七）　中島熊保（絲十九）　丸山勳（絲廿）　臼井洋介（絲廿二）　和田幸一（絲廿二）　太田速雄（絲廿二）　服部虎雄（紡二）　清水保（紡二）　武井一郎（紡十九）　東地宏（紡十九）　藤澤利八（紡十五）　中田正信（紡十七）　伊藤二男（紡十七）

黑江文雄（蠶二）　林良雄（蠶三）　本谷周藏（蠶七）　伊藤喜代二　中山吉雄　宮前邦雄　武本本治　新井宇之輔　石附文吾　宮本豐彥　友野正路　茂山芳保　伊藤力三　金炳龍　和田敎　山本慶治　駒井卯一　山岸恒一　橫山忠夫　多田作造　羽吉正雄　兒玉新三　松井清一　本山正美　黑岩學　倉橋琢雄　小山雅夫　合田信一　三浦明義　武藤寬光　小山祖一　佐藤東平　小林清志　西尾重郎　矢島文男　高橋英作　岩切作次　福本貞雄　塚田和磨　伊藤友次郎　藤井富美男　四宮太郎　寺井子藏　上田正三　齋藤生實

昭和十四年度會費納入者　古川俊之（蠶十）

昭和十四年度會費納入者金四圓也　岩切作次（絲廿三）

未納會費納入者
金拾圓也
金四圓也　關嘉四郎（絲十四）　岩切作次（絲廿三）　上田正三（紡十五）　間宮成吉（蠶七）
昭和十七年度分　昭和十二年度分

入會金納入者
金五圓也　上田正三（紡五）

一時金納入者
金貳拾圓也　久保田昌人（蠶七）（完納）　山本岩三郎（蠶八）
金四圓也（分納）　式田定千代（蠶五）

銃後資金寄附者　第十二回

金五圓也　二宮九二二
金參圓也　式田定千代　河井正
金根岸丑之輔　猪坂直一
金武圓也　星野柘弘　柳澤忠次
郁丸晴治　小林茂樹　矢島文男
岡卓郎　石坂虎次郎　栗野慎一郎
工藤見吉　小野修二　柳澤二
久保田昌人　牧島章吾　塚本優　今井治裏也　尾澤敏男　熊谷恒次
金壹圓也　久保田松藏　大岡雄三　宮靜子　高川道　細土屋正巳　石濱晉
關戸部嘉四郎正久　小笠原精三　三木辰明　白井美明　男豊子

右合計金五拾九圓也
累計金八百貳拾貳圓也

故金子教授遺兒養育資金申込分報告（第八回）

金參圓也　有賀茂
金武圓也　出野正雄　小口兼男
金壹圓也　白井美明　竹內直人
西澤政人
計金拾圓也
通計金四千貳百七拾五圓五拾錢也

故金子教授遺兒養育資金拂込分報告（第八回）

金拾圓也　今井行雄　本間國夫　唐木田藤五郎
金五圓也　伊藤喜代　百瀨市　峰岸米造　太田慎一郎
金參圓也　有賀茂　稻田實　南林孝三
金武圓也　出野正雄　遠藤文平　相馬良馬
金壹圓也　小口兼男　廣瀨芳三郎　關嘉四郎　西澤政入　白井美明　羽田滿
金壹圓也　竹內直人　竹內正司
計金拾圓也
計金七拾九圓也
通計金四千貳拾圓也

蠶絲雜誌原稿募集

蠶絲學雜誌の原稿は諸兄の御誠意により常に多數御惠投を願つてゐるので第十一卷第二號も既に編輯中であるが續いて次號（多分三月頃發行豫定）への原稿を御惠送下さる樣御願ひいたします。

蠶絲學雜誌編輯係

七久里會（第五回）を開きます

支那事變第二年目の正月を迎えることになりました。七久里會は恒例により開くことにします。毎年數十名の出席で盛會です。氣輕に御出席下さい。特に毎年御出席の諸兄から最寄の諸兄にその趣旨を御傳へ下さい。但し本年は地元倉澤先輩は喪中であられる事と十二月から一月へかけて中支より滿鮮への長い旅行中に付き不在です。

一月二日　午後四時開會、但し正午からにても差閊へなし。
會場　別所溫泉　花屋ホテル
會費　一圓五〇錢
會員缺　電車割引券は松尾町中村蠶種店にあり
出會　千曲會員御一報願はるれば幸

七久里會係　山口

出征會員慰問資金募集

出征會員に對する慰問資金を募集致します。慰問事業實行上に關する經費所要額に就ては本紙九月號へ登載の通りでありまして今後尙一層出征勇士に對する慰問に關しては努力致し度い覺悟であります。何卒本會の設立の趣旨御諒承の上奮つて御獻金賜はらんことを御願ひ致します。

上田蠶絲專門學校銃後會

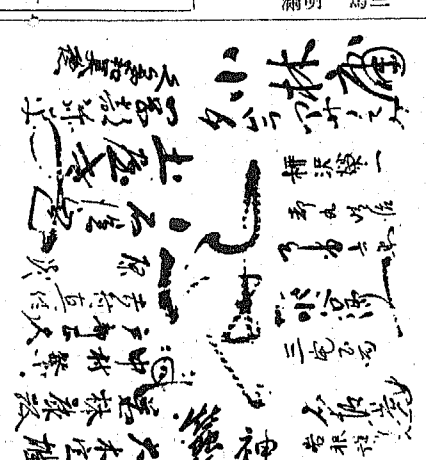
應召者並に召集解除者に就て御願ひ

一、應召者に就て
應召された場合は其の旨本會迄御一報願ひます。本紙會員動靜欄へ登載以外に應召會員御承知の方は左記事項本會迄御通報下さい。
1、應召者氏名
2、家族の現住所及氏名（留守中の通信先）
二、所屬部隊變更に就て御願ひ
軍務御多忙中甚だ御迷惑の御願で恐入りますが所屬部隊變更なされました場合は其の旨御一報願ひます。
三、召集歸解除者に就て
召集解除となつて歸鄉せられし場合は直に御一報願ひます。

支會通信

群馬及越佐千曲會合同總會

十一月六日群馬縣水上溫泉神峽樓に於て群馬千曲會　越佐千曲會合同の總會開催され母校より針塚舊校長、井上新校長、本會より倉澤教授が出席した。左は當日出席者の物した寄せ書である。



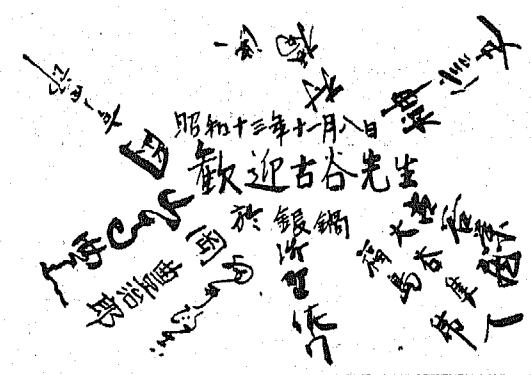
山形支會總會

日本海生

戰時体制色の菊花薫る十一月十三日をトして湯の町上山溫泉淸溪園に於て當支會總會が開かれた。種々變化の多かつた本年の支會の動きと蠶業界も善惡は別として一段落となり閑散期に向ひ、休日でもあり出席會員の多からんことを期待して居つたところ、豈計らんや、御互ひに事故もあつたであらうが、當支會總會開談に花が咲き蠶絲業界の戰後經營や貧弱なる〇〇蠶品種の改善を論ずる等、遂ひには一人減り二人減り殘りは爆彈三勇兒のみとなり殘務を整理しながら散會した時刻は誰れも知らぬが家庭には歸つたら會總會が開かれた。種々變化の多かつた本年の支會の動きと蠶業界も善惡は別として一段落となり閑散期に向ひ、休日でもあり出席會員の多からんことを期待して居つたところ、豈計らんや、御互ひに事故もあつたであらうが、當支會總會開

みすず會古谷先生歡迎會

母校古谷先生御來宮を期しみすゞ會は十一月八日一宮市銀鍋に於て夕食を共にせり。色々先生の御高說を賜り吾等會員一同感謝に堪へず。玆に當夜の寄せ書を記す。



開以來の出席不良には集會者御互が只顏を見合せて呆然たるのみ、缺席者の內には通知を與れた方もあつたが多數は無斷缺席で有つたことは此の後の開催に關して大に研究を要することゝ思はれた。

然し流會は免がれたことは本會に對し申譯けが立つた、と云ふのは中尾、前田の兩兄が委任狀を依頼されたから幸じて定數に達したので正午から議事に入り例の通り前年度の會計報告次年度繰越金〇拾錢也、萬場異議無く承（笑）認、次は會務報告に移り、十二回代議員會に對する提本問題を附議し（別記）代議員には宮崎秋雄兄を推選快諾を得、後御互の熱望として本日の會合の如き寂寥たる總會を打破し次會は明朗化した大會合化したきを語り合つたのである。終りに望み當支會の益々强化を計ることゝ本會の大發展を期待すると共に出征會員の武運長久を祈願し總會を閉じたのである。閉會後恒例に依り直さに大懇親會に移り地元町長（井上、長谷川）特別幹旋が効を奏し頭數は少かりしも强者許りの集合とて「アルコール」注射劑が血肉を廻るに連れて怪氣焰を吐き出し、當支會事務の美形を出勤された時刻頃は物凄い談笑と化し、實に愉快な一席であつた。矢張り本會や母校夜長の折から、話題の一つにもならばしあはせである。

きさの頃、長野で華燭の典をあげられた大山融君（熊岳城農事試驗場）からの挨拶——

拜啓秋冷の砌り貴會益々御隆昌の段大慶至極に存じ上げ候。

扨て今度私達の婚儀の際には有難き御祝詞頂き尙又多大の御祝儀迄下され厚く御禮申上候。

貴會の御繁榮愈々大なる樣祈上候。

又貴會の皆々樣に宜敷く御傳へ被下度く不取敢御禮申上げ候。

敬具

大山融子拜

滿洲千曲會御中

〇

湯川支會長はいま東京方面へ旅行中で遲くもこの中旬には歸つて來られるわけである。東京や上田、その他で支會長にお會ひの先輩同窓のみな樣には十分に滿洲の樣子が判つていたゞけたらうと思ふ。さういふ方々にはつとめて機會をつくつてこちらにお越しを願ひ、私達の職場をみていたゞきたいと思ふこと切なるものがある。

〇

滿洲から

これから毎月この欄を設けて出來るだけフレッシュなものを掲げたい。支會員への掲示板にもならうし、お隣の朝鮮は勿論、內地はもとより殖民地や外國にゐられる方々にも肩のこらないやうに讀んでいたゞけたらと思ふ。かたぐるしい規定もないのであるから、支會員が隨意に書いていたゞいて結構であるし、滿洲支會への呼びかけであつても有難いのである。

戰地通信

荻原幸胤氏より

其後は御無沙汰のみ申上候。扨て先生には過般目出度上田蠶絲專門學校校長に御就任の趣き遠き戰地に於て拜承仕候處謹で慶賀申上候。尙今後とも一層御敎導賜度願上候。次に小生も其後御蔭樣にて相變らず元氣で皇軍俊豪の驥尾に付して微力ながら精一ぱい御奉公中に有之候間乍他事御放念願上候。出征以來上海戰、浦東掃蕩、杭洲攻略、徐洲戰を終へて去る八月十九日には通州附近○○港を出航沿岸の殘敵と交戰しつゝ大揚子江の濁流を遡航する事八日間八月廿六日に鄱陽湖畔○○に上陸仕候。直ちに戰線に進出參加爾來二十日餘連日激戰を繰返し居候。戰鬪地域は例の淸少納言の故事にて有名なる香爐峯を中心としたる石山の山岳地帶にて殊に敵は裝備訓練優秀なる○○の精鋭而かも石山の堅壘に據り死力を盡して抵抗致居候へば晝夜難戰を重ね居候。山の上にて彈が無くなり彈の代りに石を投げ素手にて敵と組打ちをなすものなど近代戰としては極めて稀しき場面すら展開され居候。秀峯香爐峯、麗湖鄱陽湖附近一帶の敵地も斯の如く每日多數戰友の血に赤く彩られて寸尺づゝ占領致居候。而し最近流石の頑敵も餘程弱りたる模樣に候へば驕て崩れる日も遠からずと被存候。先は陣中より御祝辭旁々近況御報知申上候。（校長宛、九月十八日）

野田太郎氏より

時正に仲秋皆々樣には其の後益々御健勝にて御過しの御事かと存じます。去る日の春陣中で破れ新聞を展げ內地のニュースを物色中に偶然にも母校校長先生の移動辭令の面に眼を走らせた事がありました。然し當時朋友其の他から何等の音信も之無く其の眞僞の點を疑つてゐた次第でしたが今回計らずも先生からの御便りを目のあたりに拜見實は大に驚き此の失禮を御詫び申す次第です。時節柄益々先生の御盡力を希ふと共に蕾にも增して愈々御指導御鞭撻の程を懇願致す次第です。出征以來吾等も早や一ケ年有餘を過しましたが何時も神明の加護に依り至極元氣旺盛で御奉公致して居ますから乍他事御放念下さい。去る七月初旬山西省同古浦鐵道沿線に位置する臨汾を出發討伐南下同じく沿線に在る曲沃、候馬鎭○○渡、○州と敗殘敵大部隊への追擊殲滅戰の大激戰を展開して現在迄進擊して來ました。時に八月廿九日でした。山西省の西南端滔々と濁流渦卷く大黃河畔遠く古都西安の彼方に涯もなく拓け行く大平原を眺めつゝ塹壕の中に位置して日夜警備中です。今も日光不足の穴の中で薄明を利用してペンを走らせて居る所です。當地方は日中は實に良き小春日和ですが、夜間は內地の晩秋を偲ばせる如き寒冷が襲來して來ます。支那人は盛に麥播中です。昨日の激戰場も今日は長閑な田園風景に變つてゐます。錦地方も愈々寒冷相加はり居る折柄御身御大切の程切に懇願致します。（校長宛、十月八日）

松原幸彌太氏より

時下秋冷之候貴會益々御隆盛の段奉欣賀候。陳者小生儀出征以來一年と有餘中南支の各地を轉戰し或は警備に服するなど死力をつくし御奉公致し候。然るに未だ聖戰半ばに然かも戰の牙城武漢三鎭を屠るべく漢口目指し進擊の途將甲斐なくも病に倒れ野戰病院を轉々し恥かしくも內地病院へ轉送されるに至りし揮なき武運沟に面目も無く無念の涙で悶々致し居り候。胸中御憐察下され度候。容体は唯今のところ快方に向ひ居り候へば全快も遠かならんと存じ候につき退院次第再度戰線に馳せ參じこの不名譽を取返へし必ず御期待に副ふべく誓ひ居り候。

（千曲會宛、十月十三日）

賴富正廣氏より

時下晩秋の候愈々御淸穆の段奉大賀候陣者先便御報の通り不肖儀勇躍○○地を出發致し途中無事當地に到着以後非常に元氣にて任務に精勵致居候間何卒御安心被下度願上候。不肖微力不敏なるに拘らず昨年○月應召以來江南戰線にて奉公の微意を表し其の間母校恩師御一同樣並に同窓生各位の御熱誠なる御後援を戴き感佩龍在候處今回再度應召致し國防の第一線に立ち奮鬪の機會を得候は男子の本懷之に過ぎたるもの無之候と存候。此上は一死報國の覺悟を以て聖戰の目的貫徹に向つて奮鬪努力致し以て各位の御熱誠に報ずる所存に御座候。向寒の砌益々御自愛遊ばさるゝ樣遙かに皆樣の御健康を御祈中上候。先は取敢ず御挨拶旁近況御報申上候。

二伸、野戰雜句二三御笑覽に供上候

みいくさの一人となりて我は征き
國のまもりにつくぞうれしき
すめらぎのみはた護りてけふもまた
勇みて征くは朔北の果
夜明け星あの下あたりあこの住む
ふるさと如何にと今朝もながめつ

（十月廿七日、本校職員及千曲會宛）

岩切作次氏より

時上初冬の候先生外御一同樣には益々御淸昌の段奉賀候。陳者小生應召以來一方ならぬ御厄介に相成り御厚情の程衷心有難く御禮申上候。今や日支事變も進展し廣東陷落相次いで蔣介石最後の據點を頼みし武漢三鎭の陷落、壓倒的戰果を收め皇軍の武威あまねく全世界に發揮せるは誠に欣快に堪えず銃後皆々樣の歡喜の程も如何ばかりかと遥察致し居り候。然れ共護國の英靈となられし勇士、又は戰傷なされた勇士の上に想ひをはせる時、轉感慨無量のもの有之候。一方我々は○月末大陸の一角に上陸、時恰も張鼓峰事件にて滿ソ國境の風雲極めて急なるものあり、血の躍動を覺えつゝ一路北上し第二線○○として哈爾濱に待期に待期○ケ月今般狀況變化に伴ひ急遽北上滿洲の最北端○○に駐し、現在銃後の力强き御後援と武漢陷落の歡喜の聲を聽きながら酷寒と日夜戰ひ訓練或は○○任務を帶び滿洲國北の最前衞として○○に對し○○の寸餘たりとも侵されざる如く嚴守致し居り候。偖、現在吾々の主として駐する○○は滿蒙白系露人の大部分を占める人口萬餘の沙漠の街に御座候。十日來既に初雪を見、以後數回の降雪にて目下積雪尺餘に及び曠漠たる大草原は大雪原と化し南國育ちの吾々には物珍しき月夜の光景に御座候。氣溫は現在夜間は零下二十七八度、晝間零下二十三四度にて日一日と下降致す狀態にて一月迄零下五十餘度まで下降するとの事に御座候。最近は寒氣にも馴れ將兵一同元氣旺盛にて訓練演習は勿論、任務の爲○○國或は○○○○に行動致し酷寒零下二十餘度の中を露營をなし雪を集めて飲料水とし日夜奮鬪致し居り候。地圖にて御承知の如く一眺千里はてしなき大雪原を大空薇ひ雪を出で雪に投ずる太陽その壯嚴さは一大偉觀に御座候。大雪原の上に放牧の蒙古人が雪を飲料水とし米を常食とし馬や羊や駱駝の群が散つて行き平和境の如く裝へる狀態の中にも河一つ、○○一つ越えて裝備兵力充實せる有力なる○と相○○して暗雲○○○○を孕み、一○卽○の雰圍氣の中にあつて日夜精勵致し居り候。吾々北滿に駐する者は、御恩惠の万分の一なりとも報ずるべく粉骨碎身邦家の爲御奉公致す覺悟に御座候。先は甚だ亂筆亂文にて陣中より近況迄如斯に御座候。末筆ながら先生外御一同樣の御健康を祈り上げ候

（林敎授宛）

謹啓　寒冷の砌各位益々御淸健に被爲在奉慶賀候。扨て先般千曲會第十二回代議員會之節小生に對し莫大の金額御惠贈の御恩典に浴し、洵に恐縮感激の至に不堪候。小生在職中は長年月に亘つて常に各位の多大なる御支援と御厚情に浴し、平素感謝に充ち居る次第に候處、此度亦復此の破格の御厚遇に接し、何共御禮の申上樣も無之儀に候へ共、折角の厚き御思召に付難有拜受仕り候。茲に不取敢本紙上を借り厚く御禮申上候。乍末筆各位の目出度御越歲を奉祈候。

昭和十三年十二月吉日　敬具

千曲會々員各位御中　針塚長太郎

叙任辭令

高田正氣

母校之部

臨時副手ヲ命ス（十一月十六日）　臨時副手　新野元治郎

絹紡科勤務ヲ命ス（十一月廿一日）

願ニ依リ臨時副手ヲ免ス（十一月二十二日）

舊職員之部

正三位勳二等　廉生慶次郎

帝國學士院規程第二條ニ依リ勅旨ヲ以テ帝國學士院會員被仰付（十一月二十二日）

卒業生之部

公立實業學校敎諭　近藤正巳

八級俸當分千四百四十圓下賜（十月三十一日）

公立實業學校長　小野正男

七級俸下賜（九月三十日）

從七位勳七等　五島眞喜太

敍勳六等瑞寶章（十月十三日）

地方商工技師　山田斧一

十二級俸下賜（十月二十日）

生絲檢査所技師　沖濤治

從五位勳六等　沖濤治

兼任農林技師、敍高等官三等、蠶絲局勤務ヲ命ス（十一月十八日）

公立實業學校敎諭　石川健丸

年功加俸年額百四拾四圓下賜（十月三日）

從五位　沖濤治

敍勳六等授瑞寶章（十一月五日）

地方商工技師　內藤邦雄

內藤邦雄

願ニ依リ本職ヲ免ス

正八位

內藤邦雄

任地方技師、敍高等官七等、十一級俸下賜

大阪府勤務ヲ命ス（以上十一月二十五日）

公立實業學校敎諭　曾山直高

七級俸當分千五百圓下賜（十一月十二日）

梶田廣貞

高等官六等ヲ以テ待遇セラル（十月一日）

轉任御挨拶

謹啓時下寒冷の候益々御淸穆の段奉賀候、陳者私儀長野縣下伊那農學校在任中は公私共多大の御懇情を忝うし殉職致し候に就ては今般不圖も共左記に轉勤致し候に付、今後共相變らず御垂敎御鞭撻を賜り度奉懇願候、先は略儀乍ら以紙上御禮旁々御挨拶申述度如斯御座候敬具

昭和十三年十一月二十五日

長野縣東筑摩農學校　中澤喜雄

御挨拶

謹啓時下愈々御淸適之段奉慶賀候陳者私儀母校養蠶科在勤中は公私共多大なる御配慮に預かり千萬有難く厚く御禮申上候、今般不圖も左記に轉勤致し候に就ては今後共相變らず御垂敎御鞭撻を賜り度奉懇願候、先は略儀乍ら以紙上御禮旁々御挨拶申述度如斯御座候敬具

昭和十三年十二月

長野縣下伊那郡鼎村

下伊那農學校　新野元治郎

訃報

井手末馬氏逝去

井手末馬氏（蠶一二）は熊本農學校在勤中の所昨夏頃から腎臓病を患ひ全年十一月末熊本醫大病院に入院腎臓摘出手術を受け本年一月退院の運びに到り今春四月熊本の住所出水町から全縣阿蘇郡中津村の實家に歸り專ら療養中の處病後の衰弱甚だしく容態頓に惡化去る十一月三十日朝遂に永眠された。享年三十八歳。御遺族は御令閨と御長男（尋常科五年生）一人である。謹しんで哀悼の意を表し故人の冥福を祈つて息まない。

兒玉慶次氏逝去

製絲科第八回卒業生兒玉慶次氏は十一月廿八日逝去された。謹んで哀悼の意を表する。同氏は母校俊才の一人で母校卒業後岡崎市蠶龍社製絲場を經て加美好男氏に從ひて旭絹絲株式會社に勤務し日本レーヨン株式會社創立と共に再び加美氏に從ひて之が創設に從事し宇治工場に勤務次いで同社岡崎工場に勤務し現に工場長代理の重要にありたるものである。御遺族は未亡人（卅三才）と二女二男あり長女尋常二年、次男は本春出産の由である。右に付き十二月二日附東海千曲會長野澤泰治氏より千曲會宛の逝去經過、葬儀の模様の記した書面を左に示す。

時下初冬之砌り益々御清穆の段奉賀候陳者日本レーヨン岡崎工場長代理兒玉慶次君（絲八）儀去る十一月廿八日午後零時二十九分死去せられ三十日告別式有之候につき代表として小生參列火葬場迄御送り仕り候間御報告申上候。小生は廿八九日出張中にて本部との連絡出來ざりしは誠に申譯無之候。何れ日を定めて自宅に於て本葬有之由に候。同氏の病狀並に家庭の模様等は概要左の通りに御座候。

狀況

豫而より胃潰瘍の氣味ありたるも十月上旬苦痛一入加はりたる爲め名古屋勝沼病院に於て治療を受け二週間許りにて略々良好と相成り十月二十日より出勤致され候處十一月二十日夜突然猛烈なる腹痛と發熱有之非常に苦しまれ候由にて同夜中に自動車に依り名古屋醫大桐原外科に入院直ちに開腹手術を受けられ候。然るに其の後の經過宜しからず遂に十一月廿八日午後零時二十九分死去され候。直前迄意識甚だ鮮明にて會社の事のみ心配し種々云はれ候由に候。家庭は未亡人（三十三）才と二女二男有り長女は尋常二年次男は本春の出産の由に御座候。葬儀は非常なる盛儀にして工場全員二千五百名の參列と花輪數十、生花數十、造花數十有之火葬場に到る葬送者は全部自動車により自動車の行列をなし候。

弔慰金募集

故草野弘氏（紡九）
故岡宮辰夫氏（蠶廿五）
故望月榮作氏（絲十三）
故服部令吉氏（蠶廿二）
故兒玉慶次氏（絲八）
故井手末馬氏（蠶十二）

右六氏に對し弔慰金を募集致します故草野氏故岡宮氏故望月氏故服部氏は昭和十四年一月末日故兒玉氏井出氏は同年二月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座東京四三三四一番へ夫々故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十三年十二月

千曲會

故增田孝氏御遺族よりの禮狀

愈秋も深まり冬籠りの仕度にも何彼と心せわしき頃と相成りました。千曲會の皆々樣方には其後御機嫌うるわしく御消光の御事と御喜び申上げます。此度御命により主人の寫眞洵に御粗末で御座いますが御送り申し上げます。何卒御受取り下さいませ。引伸しに大變手間取り延引致しまして失禮で御座いました。主人戰死に當りましては御丁寧な御弔文を頂き尚葬式の際は遠路倉澤先生には御會葬下され過分の御香資迄も頂戴致しまして遺族一同衷心より感激致して居ります。然るに又今度は慰靈祭を行ひ下さいます由何んと御禮の申上げ樣も御座いません。生前は殊の外いろ〳〵御心配のみ御かけ通しで何んの御報恩も致さぬ内に戰死致しました。主人に代り心より御詫申し上げますと共に御厚情の數々有り難く厚く御禮申上げます。此の上は主人に代り聊かなりとも御恩に御報ひ申上ぐべく只管遺兒の養育に精進致す覺悟で御座います。先は失禮乍ら紙上を以て厚く御禮申上げます。末筆乍ら千曲會の御皆々樣の御健康と御繁榮を神かけて御祈りさせて頂きます。

十一月十日　　增田常子

千曲會御中

故笠原松平氏御遺族よりの禮狀

故陸軍輜重兵軍曹笠原松平儀葬儀の際は御多忙中にも不拘遠路態々御會葬被下誠に難有御厚禮申上候。實は早速拜趨御挨拶可申上の處乍略儀以書面御禮申上度如斯御座候。

昭和十三年十一月二十六日　　敬具

弟　笠原次郎
母　笠原あい
妻　笠原喜與江
外近親一同

弔慰金報告

故笠原松平氏弔慰金第七回
金壹圓也　林貞三
累計金四拾七圓五拾錢也（贈呈濟）

故山口永太郎氏弔慰金第四回
金壹圓也　塚本優
累計金拾壹圓也

故鈴木實鈴氏弔慰金第一回
金壹圓也　竹内健二

故伊藤柳作氏弔慰金第四回
金參圓也　小松茂久　中澤忠
金貳圓也　小林茂樹　久保田昌人
金壹圓也　蒲生俊興　林貞三
累計金四拾四圓也

故草野弘氏弔慰金第二回
金壹百圓也　加美好男
金貳圓也　坂求　大谷内三衞　村田一由
右合計金壹百〇六圓也
累計金壹百參拾九圓也

故望月榮作氏弔慰金第一回
金壹圓也　石坂虎治郎　小林茂樹
右合計金貳圓也

故服部令吉君を偲ぶ

小林敏

回顧已に二週年に垂んとして、長期抗戰いよいよ軌道もしるく、凛烈たる自然の冬は尚も試練の鞭を擧げんとして居る。枯木に鳴る北風も遠い彼の地、大陸に木魂する銃火の響を傳へるのか凄然として吾人の魂に泌みる。

目めくりの何時しか薄らみ、最早師走、余りにもこだはりなき時の流れに或る反抗にも似た感情が萌す。未來への流れであり又過去への流れでもある時、私は思はず目を冥つた。噫、服部君の思出、想ふべくして綴り難き思出、流れもあへず胸底をさまよひ何時しか吾が涙腺のふくらみを覺へたのであつた。去れるは日々に疎しとか、されど逝ける服部君の思出のしるけさ、あの顔、あの聲、あの笑ひ今尚眼に在り耳底ににじむ。

炎熱と繁忙の夏も去り母校にも漸く泌々とした秋が訪れ、慰問袋に銃後の眞心を封じつゝ在つた頃、ふと齎らされた知らせに愕然としたのだ。あの健康な、元氣な彼の思出は頑强にその事實たる事を拒み續けた。文字通り彈丸雨飛の戰場の事それを疑ふ方に難があつたかも知れぬ。だが余りにも彼の健在せる姿が胸中に生々しかつたからだ。不安焦躁の數日遂ひに鄉里より齎らされたものは冷い一片の悲報のみであつた。嚴然たる現實、しばしは無言、秒針の音のみ靑白く神經に傳はるのみであつた。服部君は逝いたのだ。

思ひ起せばほんの昨日の樣な氣がする。事變始まつて間もない昨年の夏、力と汗に奉仕すべき銃後の夏を、ふがいなくも病室に横臥となつた身をかこつて居た自分、いきれを傳はつて聞えて來る歡呼のどよめき、戰線へ〳〵、ひたむきな昂奮の波は病室の白いカーテンにも傳はつて居た。一宵、訪れて呉れた服部君、久し振りの邂逅に蚊帳の外に這ひ出して、團扇を使ひつゝ語り合つた事、除隊後の彼元氣な彼、ハリのある笑ひ聲は今斯うして追想して居る部屋の闇から響いてくる樣な氣がする。

慰められた自分は遂に彼の最後を慰め得なかつたのだ。許せよ、服部君よ。

今にしてこそ思ひ當る。秋の夜長を何時しか煙燈の端にまどろんだ時、ふと傍に訪れた服部君。「君、すつかり綺麗になつたね」とは已が夢に發した言葉であつた。思ひなしかその笑ひが如何にも靑白く沈んで居た樣な氣がする。それは去る十月の半ば頃の事、彼の戰死後の事だつた。今までに經驗した事の無い樣な夢だつた。間もなく知つた彼の死に私は泌々と靈魂を考へた事であつた。大陸の曠野に散つた彼の靈は何處の星と輝いて居る事であらふか。彼の生前の活躍、想ふだに肉の引緊まるものがある。その戰績を偲び彼の勳功を讃へやう。

昭和十年卒業後就職する暇もなく服部君は十二月敦賀歩兵第十九聯隊に入隊、全月半ば滿洲守備の重任を帶びて渡滿し、以來北滿各地に匪賊討伐に從軍し、昨年一月初年兵教育係として赤誠奉公、全年五月内地に凱旋故國の土を踏んだのであつた。いよ〳〵六月一日除隊となり、幾多の實戰に練磨蘊蓄せられた頑健な肉體と齎勅たる意氣とを以て將に社會の非常時に活躍せんとした時端なくも暴支膺懲の動員下命となり、昨年〇月十三日付を以て應召、勇躍征途に上り全月二十九日目的地〇〇に上陸、翌十月三十日あの激烈を極めし上海戰線に於て腹部盲貫銃創の重傷を負ひたるも奇蹟的にも十一月初め全快となり間もなく十月より又々第一線にて活躍、南京攻略戰に參加、十二月九日光華門の激戰に再び大腿部貫通銃創を受けたるも之又間もなく全快、年末より昆山地方の守備に任じ本年四月末より除州攻略戰に參加幾多の戰功を樹て六月中旬より宣興方面の守備に當りいよ〳〵八月末あの歴史的武漢大攻略戰に參加奮戰中惜しくも武運拙く九月八日瑞昌附近二里程の山奥にて命令受領中憎むべき敵迫擊砲彈の炸烈する處となり鬼神も哭く壯烈な最後を遂げられたのだ。九月三日附の實家への便りに「生還を期せず、これが最後と覺悟いたし居り候云々」とは彼の絶筆との由、唯感慨に胸塞がるのみ。嗚呼、重傷再度にして屈せず癒れて後遂ひに止んだ熱血の士、服部君よ。無言、これこそ眞の讃辭であらう。

思へば彼の卒業は直ちに兵役への連續であつた。眞摯なる學徒として培はれたる靈專魂、修得せる學術、技藝は結晶して今回の偉勳となつたものであらふ。

校訓「進而當難局」を眞に實踐具顯せる彼身を挺して國に殉じた服部君の靈よ。噫悲なる哉、壯なる哉、君の熱血迸しつて江南血糊を結ぶ。嗚呼偉なる哉、君の輸血、大陸への輸血、君死して大陸生く。今や生氣澎湃として東亞に漲る。聞けその脈々たる律動を。また何をか云はん、唯肅然として頭を垂るゝのみである。諒せよ、服部君。（十三年十二月五日夜）

會員動靜

（十二月五日現在）

曾山直高（蠶四）（勤）群馬縣碓氷郡安中町、群馬縣立蠶絲學校（住）安中町上ノ尻（舊、北信支會）
尾見祐八（蠶五）（勤）朝鮮大邱府、慶尙北道原蠶種製造所（住）大邱府外新川洞（訂正）
原田種龜（蠶九）（勤）上田市、小縣蠶業學校
井出末馬（蠶一二）昭和十三年十一月二十九日死亡
川島熊太郎（蠶一二）（勤）茨城縣鹿島郡鹿島町、茨城縣立鹿島農學校（住）鹿島郡鉾田町橋向
關只（蠶一三）（勤）休職（住）小縣郡鹽川村大字鹽川
小山惠治（蠶一五）（勤）下高井郡中野町、下高井蠶業學校
岩下龍哉（蠶一八）（勤）ナシ（住）北佐久郡南御牧村八幡
中澤喜雄（蠶一八）（勤）東筑摩郡鹽尻町、長野縣立東筑摩農學校（住）鹽尻町大門（舊、龍川支會）
平岡英司（蠶二一）（應召）
新野元治郎（蠶二一）（勤）下伊那郡鼎村、長野縣立下伊那農學校（住）鼎村下茶屋下井友四郎方（舊、北信支會）
國島正（蠶二二）（應召）
本居高行（蠶二四）（勤）本校紡織科人絹部（住）上田市應匠町、岡德治郎方
田中三郎（絲一）（勤）三重縣鈴鹿郡龜山町東町一三〇、龜山製絲株式會社（住）四日市市外室山三一三
中澤忠（絲一）（勤）更級郡松代町、本六工社、電話一番
井上一郎（絲五）（勤）神戸市神戸區明石町、三菱商事神戸支店（舊、神奈川支會）
兒玉慶次（絲八）昭和十三年十一月廿八日死亡
依田武治（絲九）（勤）大阪市東區北濱二ノ九〇片倉館內、東亞纖維工業株式會社、電話北濱六、八九〇（住）神戸市灘區大和町二ノ一五、電話御影四、七三七
村山晋（絲九）（勤）病氣ノ爲メ休勤（住）兵庫縣川邊郡立花村塚口字池田一二二一ノ七一
清水重雄（絲一〇）（勤）福島縣伊達郡長岡村、田中養鷄園
依田實（絲二〇）（勤）福井市佐佳技中町、福井縣生絲檢査所
田上忠義（絲二〇）（勤）滿洲國西豐縣西豐、西豐縣柞蠶製絲同業公會
副田好美（絲二一）（應召）
牛草榮喜（絲二一）（應召）
太田三郎（絲二一）（勤）三重縣三重郡四鄉村室山、室山製絲株式會社
三宅雄（絲二四）（應召）
中川正（紡一五）（勤）名古屋市、愛知縣經濟部商工第一課（住）名古屋市西區押切町二ノ二七井上義一方
迫繁（紡一六）（應召）
田中てる子（舊教）（勤）三重縣三重郡四鄉村室山、室山製絲株式會社
市川みす（舊教）（改性）土屋ト改ム（勤）ナシ（住）北佐久郡輕井澤町沓掛、土屋長平方
金井さと（舊教）（勤）ナシ（住）上田市下紺屋町
原ふみ子（舊教）（勤）ナシ（住）廣島市京橋町三八（十一月號時報訂正）
高寺穐子（舊教）（勤）ナシ（住）小縣郡神川村字蒼久保
小林みよし（舊教）退會
島田玉子（舊教）仝
金井たかえ（舊教）仝
倉重ウメノ（舊教）（勤）廣島縣双三郡十日市町、廣島縣北部乾繭組合更生社（住）仝上
上平ひろ（教一三）（勤）山岸ト改ム（勤）ナシ（住）宮城縣遠田郡不動堂村藥山
山崎みつ子（教三）（勤）ナシ（住）東京市豐島區長崎南町二ノ二、〇三五、小室俊吾方
西原藤（教三）（勤）兵庫縣佐用郡佐用町、佐用製絲所
平田時江（教四）（勤）ナシ（住）小縣郡東鹽田村下之鄉
仲藤潮（教四）（勤）岐阜市近ノ島、岐阜縣繭檢定所（住）仝上
黑澤壽喜子（教五）（勤）滿洲國奉天省海城縣公署農事合作社（住）仝上
藤森ふじ子（教五）（勤）愛知縣東春日井郡高藏寺町、近藤製絲所（住）仝上
山崎傳（教六）（勤）奈良縣吉野郡下市町、大和繭絲購販利用組合（住）仝上

父の喪中に付き年末年始缺禮仕候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
和田仙太郎

時局柄年賀狀差控申候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
石倉新十郎

歲末祝御健勝
時局方針に遵ひ年賀狀差控申可候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
佐藤利一

時局柄年賀狀差控申候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
岡德治郎

母の喪中に付き年末年始缺禮仕候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
內藤榮吉

母の喪中に付き年末年始缺禮仕候
昭和十三年十二月
鐘淵紡績株式會社新町支店
石坂虎次郎

喪中（妻死亡）に付年末年始の御挨拶を御遠慮申上候
上海九江路五〇號
三井銀行ビル二階
華中蠶絲株式會社
寓居　上海狄思威路四六二號
久保田昌人

喪中に付き年賀缺禮仕候
昭和十三年十二月
松本市外神田
水城孝男

滿支旅行及長子喪中に付き年末年始缺禮仕候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
倉澤美德

時局柄年賀狀差控申候
昭和十三年十二月
上田蠶絲專門學校
小松忠一郎

投稿規定

一、內容は不問、平易なる學術研究、會員消息に關する物は特に歡迎。取捨は當方に一任せられたい。輯編の都合に依り全部又は一部を來月廻しとする事がある。
一、原稿は特に豫め申込無き限り返戻致しません。
一、締切は毎月六日限、特に一月號は一日發行とする爲め二十日限とする。
一、原稿は開封し三錢切手（第四種百二十瓦迄）を貼布して送附し通信文があつたら別に葉書等にて通知されるが得策である。
一、必ず原稿紙を使用し明瞭に普通平假名でお書き下さい。又句讀點を必ず施して一字分の間隔を置いて下さい
一、匿名で掲載希望の場合も輯編部丈へは姓名をお明し下さい。然らざれば遺憾乍ら掲載を見合せる場合があります。
一、圖面や寄せ書は一尺八寸×一尺三寸以內とし必ず白紙に墨書して下さい。
一、原稿紙は御請求次第送附す。普通の原稿紙を使用する場合は一行十八字丈書込まれ度い。

編輯室より

▽今月號も第一面に適當なる記事が無く又「講話ところ〴〵」の御危厄にならねばならぬかと悲觀をしてゐたら締切間際になつて中澤二郎氏の「秋田縣の種苗交換會の紹介」と云ふ一文を得て漸く安堵した。本紙上より厚く御禮申上げる次第である。斯く御禮を申上げて置いて次に御註文がある。今回の御寄稿は二十字詰に書いてあつたので行數を讀むのに手數を要した。今後は十八字詰に書かれん事を希望する。それと同時に會員諸氏に第一面に適する記事の御寄稿を願ふ事切なるものがある。
▽例に依り一月號に年賀廣告を募集してゐる。この收入は收入豫算として計上されてゐる。本誌援助と冗費節約の意味で御應募願ひ度い。時局柄同窓生間、母校職員と同窓生間の年賀狀は全廢し本廣告を以て替へ度い。謹賀戰勝新年とか謹賀躍進日本初春とか云ふ文句は我國の現況に最も房はしきものである。
▽例年の如く母校訪問旁々スユーに御出掛け下さいと宣傳して置く。時局柄スキーに依る体位向上は最も肝要なものである。然し母校の冬休が變更されて十二月二十日から明春一月十五日迄になつた事を御承知下さい。
▽昭和十三年も間も無く去る。本年は多少の不安は無いでも無いが最も生甲斐のある年であつたと思ふ。我等は斯くの如き年に若き働き得る年齡に於て生を享けた事を衷心から喜ぶ。やがて來る春はより困難は倍加されより生甲斐は感ぜられるであらう。來年はうんと頑張らうよ。

昭和十四年度蠶種案內

○交雜種
×龍淅　華江　仙
×滿龍　華月　仙系
×淅龍　華江　仙（新）五粒定粒用
×滿分離白一號月系
○原蠶種
龍華仙　分離白一號
分離白二號　淅江
滿月系　國蠶支一〇六號
○病毒皆無

廣島縣御調郡奧村綾目八七六
蠶種業　小川保
電話市村局十一番
振替廣島二〇七六三番
（甲）本宅
（乙）蠶種部
大阪二四六番
電報は市村局、別便配達料不要